

【実践記録】

「大造じいさんとがん」

Ⅱ 総合演習としての学習活動Ⅱ

I 「大造じいさんとがん」の学習にかける願い

一二年ほど前、名古屋の中村敬三先生の「大造じいさんとがん」の実践報告を聞かせてもらったことがある。その時見せてもらった子供たちの学習ノートを見て驚いた。なんとノート1冊びつしりと自分の読み取りを書き込んであった。それを見ながら「これだけ徹底して書く仕事をやらせれば国語の力は確実に伸びるに違いない」とつくづく思った。そして、自分もいつかこういう徹底した個人学習に挑戦してみたいという憧れを持った。今年五年の担任となり、この教材に取り組む機会ができた。私はこういう追求のしがいのある教材で、子供たちにこれまで蓄えてきた力のすべてを出し切って追求する学習を経験させたかった。また、私の方としても自分がついそんな課題について徹底的にチャレンジしてみたいと思った。つまり、この教材の学習で私と子供たちの総合演習をやってみたいと思ったのである。

そして、もう一つ私にはこの教材でする仕事があった。今年、荃書房から出版された「子供の自学力を育てる国語の授業」に私の「大造じいさんとがん」学習指導プランを書かせてもらった。自分としての精一杯の教材解釈、展開案を書いたのだったが、果たしてそれが妥当なものか、もう一度授業を通して検証してみたかった。そういういくつかの願いをもってこの教材に取り組んだのであった。

Ⅱ 全体の学習計画

学習計画は、できるだけ子供自身の読みから出
発しそれを発展的に追求していくものでありたいと思った。だから、学習計画は、個人
学習を軸にして組み立てることにした。

- ・ 大筋をとらえる。
- ・ 文章に即して大造じいさんの心情を自分なりに追求する。
- ・ まだわからないところをあきらかにする。

ということをねらった。その上に立って、一斉学習では

残された課題を各自の読みをもとにして追求していく。

という流れで全体の計画を考えた。

【指導計画】

(第一次) 3時間

- ・全文を通読し、学習計画をたてる
- ①全文を通読し、初発の感想を書く
- ②漢字・言葉の意味調べ
- ②あらすじをつかみ、感想や疑問を出し合う中で、追求の視点をつくる。

(第二次) 9時間

・場面ごとに詳しく読む

- ①1章の個人学習
- ②「たかが鳥」から「うーむ」へと残雪を見る目が変化していく大造じいさんの心情を追求する。
- ③2章の個人学習
- ④「うーん」とうなってしまう大造じいさんの心情を追求する。
- ⑤3章の個人学習
- ⑥「うまくいくぞ」とにっこりする大造じいさんの心情を追求する。
- ⑦「ただの鳥に対してしているような気がしなかった。」という大造じいさんの心情を追求する。
- ⑧はればれとした顔つきで残雪を見守る大造じいさんの心情を追求する。

(第三次) 1時間

・学習のまとめ

- ①学習後の感想を書く。

個人学習と一斉学習を交互に繰り返す形をとったのは、まだ、一気に全文にわたる個人学習をする力が子供たちにはないからである。また、一章ずつ読みを確かなものにしていくことで、次章の個人学習がより充実していくだろうと考えたからである。

Ⅲ 実際の学習活動とその分析

(1) 第一次の学習活動

① 初発の感想について

私が全文を朗読したあと、感想を書かせた。

子供たちが書いた感想のあらまきは次の通りである。

《大造じいさんについて》

- ・「たかが鳥のことだ」とおじいさんは、2回も思っているけれども、2回も「たい

したちえをもっているものだな」と思っている。仲間が殺されそうになると、残雪がせいっぱいなぐられても敵をやっつけようとする。人間でもなかなかできないことなのに、このことにおじいさんも心をうたれてうつのをやめたのだと思った。

(亜紀子)

・大造じいさんは、残雪を二年前につかまえたがんでつかまえようとしたけど、残雪の勇氣にまけたのだな。(真ひと)

・大造じいさんは、残雪を敵だとおもっているけど、仲間を助けたので、敵は敵でも人間のような良い敵だと思ったと一番に思いました。かしこいがんだけど、残雪をうとうと思つたのは、なぜかなあと思いました。私は、大造じいさんはかりゆうどだし、がんの頭領だから、いくら心のやさしいがんで残雪にちようせんしたかつたという氣持ちだと思えます。(明子)

・最初のじいさんの氣持ちと後の氣持ちが変わっているんじゃないかと思う。最初は、がんをとったり、りようじゆうでうとうとしたりしたけど、後になると、けがをしていいる頭領をじぶんのおりに入れて、元気になるまで世話をしていたから最初のおじいさんはいやだつたけど、がんを世話しているおじいさんはやさしいひとだなあと思つた。(智子)

・じいさんがいまましく思っていたから、だいぶん残雪にやられていると思つた。たにしで鳥をつる作戦で一羽手に入れただけではしやいでいたから、よつぽど残雪にやられたんやなあと思つた。(大輔)

・大造じいさんは、失敗ばかりしていたけどあきらめないで、今年こそはと思つてい

つしようけんめいにかんの群れをおいかけていったところがすごいと思う。残雪を殺さないで正々堂々とやっつけてやるぞといったところがぼくは、大造じいさんはいい人だなと思つた。(和幸)

・「うむ」というところは、なかなかやるなあと思っている。そして、くつちよしくて、またよけいにかみたいとおもっている。最後は、大造じいさんは、ライバルのように思っていると思う(善崇)

・大造じいさんは、毎年毎年残雪ににげられているけど、なんとしてもとろうと思つて、毎年あきらめずによくとろうと思つた。僕やつたらそんなに長く続かないと思う。(哲郎)

・大造じいさんは、しゆうねんぶかい人と思つた。(晃典)

・ぼくは、大造じいさんは、やさしい人だと思う。残雪がはやぶさと戦っている時、じゆうで打たなかつたし、残雪の世話や、むねのちりようもしてやったり、ひきょうなやり方でつかまえたくないといっているから。(幸則)

・大造じいさんは、がんを手にいれようとおもっていたのに、がんのむねのきずを治してあげようと冬の間大造じいさんのおりの中に入れてあげた。大造じいさんは、鳥のことを思つてやさしくしてあげて親切なおじいさんと思ひました。(志穂)

・がんをとつてもころさないのでもいいおじいさんと思つた。(智士)

子供たちの初発の感想を分析してみると次のようになる。

- ・残雪に對するじいさんの執念はかなりの子が感じている。だが、なぜそこまで執念を燃やして戦おうとするのかについての読みには差がある。
- ・残雪をかいほうしてやり、逃がしてやるじいさんの行為についての感想は単にやさしいとらえている子から、残雪によつて変革されたと言っている子まで様々である。
- ・じいさんの変容を全体的な視野でとらえている子は少ない。

初発の感想の分析から、これからの学習の方向も見えてくるように思う。つまり、

◎じいさんの執念の底にあるものを追求していくこと

◎じいさんが残雪を見る目がどう変わっていくのか、そうさせたものは何なのか、ということを追求すること

これらが、これからの学習の大きな柱になるということである。

最初の計画では、この初発の感想をみんなで出し合いながら子供たちの力でそういう追求の柱を見つけさせるつもりだった。だが、時間の都合でカットしてしまった。惜しいことをしたと後悔している。これだけ初発の感想で様々な読みが出ているのだから、話し合わせれば、結構おもしろい学習になったのではないかと思う

(2) 第二次の学習活動

① 個人学習について

ア 視写

今まで、いくつかの教材で個人学習に取り組んできたが、視写は時間の都合で省くことが多かった。やるとしても部分に限って行っていた。その理由は、読解に重点を置いたからである。視写はどうしてもただの作業になりがちであり、読み深めのためにそれほど積極的な意味を感じなかったからである。視写に時間を費やすよりも、ひとり読み(書き込み)に時間をかけた方が意味があると思つたからである。

だが、今回は、全文を視写させようと思つた。

それは、第一に私のクラスには、まだごく基本的な文を綴れない子が何人かおり、その子たちにはもともとと文章を書く練習をさせる必要があると思つたからである。

第二には、目に見えての効果はないかもしれないが、読解を深めるためには、やはり、音読・黙読だけでなく書き写すことも大事だと思うからである。確かに全文を一気に写す場合はたんなる作業に終わりやすいが、場面を区切って少しずつ視写すれば、文章への集中度も高まる。ていねいに文章を書き写しながら、音読・黙読だけでは気が付かない助詞や副詞、文末表現などの細かな部分に目をむけさせたいと思つた。

第三に視写という学習活動が子供たちにとって楽しいものだからである。今まで視写を何度かやってきたが、子供たちは一度も嫌がったことはない。ノートを文字で埋めていく快感、そこには確かに学習しているという実感があるのだろうか。視写の学習に對

するこうした子供たちの積極的な姿勢をもっと評価すべきではないかと思った。

幸い、今回は研究授業の予定もなく、学習進度を気にする必要がなかったから、思い切って時間を使い、視写に取り組ませることにした。

単なる作業に陥らないように、一章ずつ視写しては、書き込み、一斉学習という形で進めた。それは、いろんな意味でたいへん良かった。もし、話し合い学習だけで進めたら、子供たちはだれてしまったかもしれない。学習の節目節目に視写があるので、そこで学習が引き締められ、新たな気持ちで次の章の学習に向かえたように思う。また、一斉学習や一人読みの場では、十分動き切れない子供も視写だけは、自力で進められるから積極的になり、そこでまた学習意欲も立て直していった。

結果的に「大造じいさんとがん」の学習は1ヶ月以上に渡ったのだが、子供たちは最後まで学習に積極的に向かってくれた。その原因の一つは、学習の区切りごとに置いた視写のおかげではなかったかと思っている。

イ一人読み（書き込み）

一人読みの指導については、一学期に「ふき子の父」「お母さんの木」などで試みているので、今回は子供に自由に書き込ませることにした。そして、子供たちの間を回りながら、大事な言葉に目をつけている子供がいれば、それをどんどんみんなに紹介してやって、まだそこに気付いていない子供たちにも意識させるようにした。

学級の2/3ぐらいの子供は一応自力で一人読みみができるようになっていた。だが、やはり残り1/3の子供は放っておくとぼんやりと時間をすごしてしまうのだった。そこで、途中からそういう子供たちを集めて、私と一緒に個人学習の作業をすることにした。

私の方から目をつける言葉を教えて、それについての読みを言わせたり、じいさんの気持ちを感じられる言葉を自由に出させてみたりした。ひとりでは学習が進められなかった子供たちも、この場ではとても積極的になり、よい考えもどんだしてくるのだった。この子供たちには、考えの糸口が見えないことでつまづいていたのであって決して読む力（イメージする力）が劣っているのではないことを改めて思った。

子供たちは、こういう形での学習をとっても喜んでくれ、一人読みの時間になると、「先生、また後ろで勉強しよう」というのであった。もちろんどの子も一人読みができれば、それにこしたことはないが、現段階では、個に応じた学習ということが必要なのだと思っている。

② 一斉学習について

一斉学習の目標は、一言で言えば、「主題に迫る」ことである。そのことはもちろん念頭において進めたものではあるが、私にはそのことと別に「大造じいさんとがん」の一斉学習で試みたいことはいくつもあった。それを整理してみると次のようなことである。

(子供の側に育てたいもの)
ア読解の方法・技術を身につける
イドの子も発言できる力を持つ(私の側で模索している課題)
ウ子供の思考に沿った展開をつくる
エ焦点化された授業の構成
オ具体的で明確な発問
カ一人読みからの発展としての一斉学習のあり方

こうしたいいくつもの欲張った課題を持ちながら授業を進めていった。もちろん、いつもすべての課題を考えてやったのではない。場面ごとに学習していく中で、それぞれの課題について試みるのにふさわしいチャンスがきたとき、そのことを意識的にやったということがある。

(3) 一斉学習の授業記録

【昭 63 10月15日(木)】

『大造じいさんとがん』①

【教材文】

今年も、残雪は、がんの群れを率いて、ぬま地にやってきた。

残雪というのは、一わのがんにつけられた名前である。左右のつばさに一か所ずつ、真っ白な混じり毛をもっていたので、かりゅうどたちから、そうよばれていた。

残雪は、このぬま地に集まるがんの頭領らしい。なかなかりゅうなやつで、なかまがえをあさっている間も、油断なく気を配っていて、りようじゅうのとどく所まで、決して人間を寄せつけなかった。

大造じいさんは、このぬま地をかり場にしていたが、いつごろからか、この残雪が来るようになってから、一わのがんも手に入れることができなくなったので、いまいましく思っていた。そこで、残雪がやってきたと知ると、大造じいさんは、今年こそはと、かねて考えておいた特別な方法にとりかかった。

それは、いつもがんのえをあさる辺りに、一面、くいをうちこんで、たにしをつけたうなぎつりばりを、たたみ糸で結びつけておくことだった。じいさんは、ひとばんじゅうかかって、たくさんのうなぎつりばりをしかけておいた。

一章の前半について一斉学習した時、これから先、自力で読み込んでいくための基本的な読みの姿勢を作りたいと思った。それは、ある言葉にこもるじいさんの心情を追求するとき、必ずその前後の文章の叙述とつなげて考えるということである。この場面で文脈はつぎのようになっていく。

りようじゅうのとどく所まで決して人間を寄せつけなかった。

いつごろからか 一わのがんも

いまいましく思っていた

今年こそは

かねて考えておいた特別な方法

ひとばんじゅうかかって

こうした言葉のつながりを読み取る目を育てたいと意図してやった。

【授業記録】

美豊子 朗読

裕幸 朗読

Tまず、みんなの書込みの中で問題が出ていたのでそれから考えてみたいと思います。和幸君がね、「どうして、残雪という名前がついたのだろう」と問題を書いていました。どう、なぜ残雪という名前がついたの？

保 両方のつばさに白いもんがついててな、なんか、残っている雪みたいやでな、「残雪」という名前がついたん。めずらしいで、力「消え残った雪」て書いた。辞書に。

T保のいったことわかる？

大輔 うん、わかる。羽の所にな雪みたいに白いものが残っているさかいにな、残雪という名前がついたん力羽が山みたいになってるでや。茶色い山みたい盛りあがっててそこに白いもんがある。

Tそう、だから残雪という名前がついたんだ。なぜつけたの？

今、保はそれがめずらしかったからつけたんじゃないかと言ってるんだけど。

幸則 同じ。羽が白っぽいやつがめずらしかったん
T羽がめずらしかったのね。美希は？

美希 残雪は、勇気とか、賢さがあるで、めずらしいん。

Tはい。「めずらしい」の中身がちがったね。美希、もういつべん言っ

美希うんとな、勇気とか、賢さがあるさかいにな、めずらしいん。

T①めずらしい羽をしているから (板書)

②勇気とか知恵があるから
どっちだと思う。

力 ぼくもだいたい②やけどな、この残雪の他にな、同じかしこい鳥があんまりいいひんかったさかいな、ほやさかいにな、この鳥は名前がついたと思うしな、がんやのに、特別な名前がついた。

Tうん。わかる？……つまり、「残雪」という名前がついてるけど、どうなんでしょう。他のがんにもやつぱりいろんな名前がついてたんでしようか。

Cs いや、こいつだけ

T例えば、頭が白いから富士山とか、足が黒いから

「黒足」とか、あちこちのがんに名前がついてたと思いますか。

Cs 残雪だけ

Tどうして。他のがんにはなくて、こいつだけついてるんだ、ていうのは、どこから考えられる。

さあ、さがして。

ちゃんとかいてあるでしょ。こいつだけに特別な名前がついたんだ、というわけがちゃんと書いてある。

智子「残雪は、このぬま地に集まるがんの頭領らしい。なかなかりこうなやつで、なまがえをあさる間も、油断なく気を配っていて、りょうじゅうのとどく所まで決して人間を寄せつけなかった。」

Tだから？そう書いてあるからどうなの。

そこにわけがあるんだけど

智子……

智士 ぼくもだいたい同じ。あの、残雪は、ずっとまえはいいひんかったやん。ほんで、やってくるようになったやん。そいつがきてから、りょうじたちはな、がんがとれへんようになったでな、ほんで、「残雪」という名前がついたん。

Tすごいこと言う！今智士がうまいこといったね。

暢子、わかった？(首をふる) 智士、もういつべん言っ

智士 残雪は、ずっとまえはいいひんかったやん。けど、このがんが、きてからな、りょうじたちはな、ほの前はいいひんかったやん、りょうじたちは。けどな、ほのがんがきてからなつかめんようになったん。ほのがんは、かしこいで。ほんで、残雪とついたん。力 あのな、残雪はな、前からずっときてたんじゃなくてな、ぼくはな、これ読むと、「今年も」て書いてるでな、前から、去年かほのぐらいから来たと思うん。前はな、いっばいがんをつかめてたと思うしな、いきなり来た、いうか、来るようになってから、つかめへんようになったでな、こいつはがんのなかでもかしこいやつやな、と思っ

ほんで名前がついたん。

裕幸 先生、あんな、力君が「去年ぐらいから」ていうたけどな、去年ぐらいやったら、「いつごろからか、この残雪が来るようになってから」て書かへんと思う。ほんで、もうちよつとあるん。

T うん。四五年はあるんよね。「いつごろからか」て書いてるからね。

「残雪」という名前は来た時からついていたの？

T 智士ついてへん。はじめは、がん。

哲郎 最初はな、ふつうのがんとよばれてたんやけどな、そのがんがくるようになってからこの人ら全然取れへんようになったんやろ。ほんで、こいつはかしこいで、特別に名前がついたん。

T 志穂、わかった？ 哲ちゃん、もういつへんはつきり言うたって。

最初はただのがんだったって。

哲郎 最初はただのがんやったけど、このがんが来てから、全然とれんようになって、ほんで、

力 先生、これなんか、四五年前、なんかがんがとれへんなあと思ってたな、大群みでたら、一羽だけちがうのがまじってて、前はこいつがいんかったから取れたんかなあと思ってた、こいつのせいでつかめへんようになったんやと思ってたほんで。

T 前、この沼地をかり場に行っているかりゆうどたちは、たくさんのがんをとっていたところか、あるときから、ぱったりとれなくなってしまった。とこうしてかな、なぜと

れないのかな、と見て見ているうちに、がんの群れの先頭にいつも一匹だけ白い毛のやつがいる。「あいつのせいで、とれないんだ」とかりゆうどたちが特別な目で見るようになる。

C ほんで、残雪という名前がついたん。

T ほうすると、和幸の問題、もういいかな。ただめずらしくてつけたんじゃない。りょうしたちの思いがあるんだね。

で、そういう残雪を大造じいさんは、どんな思いで見えていたか。なんて書いてますか。

C いまいましく思っていた。

T 「いまいましく思っていた」(板書)

「いまいましく」って、みんながよくわかる言葉でいえば、どういう言葉になる？

暢子 くやしくてたまらない

C 腹が立つ

勇也 にくたらしい。ごうわく。

T そうだ、おまえらのことばでいえば、「ごうがわく」だね。

なぜじいさんは、残雪に対してくやしくてたまらない、にくたらしい、ごうがわく、という気持ちになるのか。

それ、読んで、さがしてごらん。いくつもあると思うよ。

留美 先生、「ごうがわく」て何？

T あれ、使わへん？ むしやくしやくする。むかむかするということ。
力あるある。小さいもんにばかにされたら、いくら年上やで、たたいたらあかんいうて

もたたきとうなる。

T (しばらく待つ) はい、なぜ？明子

明子 残雪が来るようになってからな、残雪の指導のせいだな、一羽のガンも手にはいらなくなつたでくやし。

亜紀子「りょうじゅうの届く所まで決して」やでな、一歩でも入りこめなかつたさかいに、きびしく、守ってるような気がしたさかいに、こいつがいるさかいに一匹もとれんのやと思つて。

勇也先生、そのガンが人間を寄せつけないんか。

Tうん。……「寄せつけない」でどうすることかわかる？

智士あんな、寄つていったらな、「ガアガア」言うてな

保 ちやう。ほんなんバーンとうつたらしまいやん

人がちかづいたら、てっぽうがとどかんとこに移動したらいいん。

力うん。「近づけんかった」というよりもな、その間をだいたい、自分で考えてな、ここ

まではぜつたい鉄砲のたまとどかんやろ、いうところまでな、離れていくん。

Tうん。ちかづいたらガアガアっておどかさんじゃなくて(C笑い)

智士ちがうわ。きよつたら「もどつてこい」いうてガアガア鳴くんよ。

Tああ、そうか。ちかづいたら、ガアガアと合図をしてか。

ほと、鉄砲のきよりが十分なあいだは、残雪はにげないんですね。ところが、もうちよつとで撃てるというところまできたとたん、ガアガアと合図して飛んでいってしまう。

はい。二つでました。ほか。まだあるよ。

……一羽のガンもとれないことがどうしてそんなにくやしいの？

浩生あんな、去年もとれなかつたで。

Tうん……今年だけじゃないんやね。去年も一昨年も一匹もとれない。

裕幸あんな残雪さえいなければ、捕れてたのに。

T残雪がくるまでは、たくさんとれてたんでしようねじいさんだから、(力 ベテラン！)

そう、それが、残雪がきてからも何年も一匹もとれない。

裕幸 もうノイローゼになりそう。(C笑い)

Tまだない？……さっき力がぼそぼそといつてただけど。「ごうがわく」とか、「はらが立つ」というのは、どういう相手のとき？……

C……

Tさっき、ちっこいやつに馬鹿にされたとき、むかむかするて、いったでしよ。

保 ああ、ほんで、人間が鳥にばかにされてるでや。

T保、言つて

保 あんな、おじいさんは人間やけど、残雪は鳥やろ。たかが鳥ぐらいにばかにされてるでな、ほんで、ごうがわく。

Tわかる？じいさんは、残雪に歯が立たないんですね。歯が立たなくて当然の相手なんですか？たかが鳥な

んです。じいさんは、自信もってるんだ。(力 おれはベテランなんだ)それが歯が立た

ない。

そうすると、『いまいましく思った』その原因となると線で結んでごらん。書込みする時も、その言葉だけで考えるんじゃなくて、つなげて考えることができるようになってほしい。

裕幸 線で結ぶとこいっぱいあるわ。

C (ノートに作業)

C そうすると、この『いまいましい』が何につながるかというところ、『今年こそは』

ここには、じいさんのどんな気持ちがある？

勇也 今に見てえよ。今年こそはぜったいとつたる

T 『今年こそは ()』(ここにどんな言葉を入れる

真人今年こそは、がんをやっつけてやる。

志穂今年こそは一わぐらいとろう。

暢子 今年こそは、ぜんぶつかんだる

裕幸なんか、残雪覚悟しとけよという感じ

T そういうじいさんのなかにたまっているものがここに入っているのね。

じゃ、そういうじいさんの強い思いは、じいさんのどんなところに出ていますか？そのじいさんの気持ちの強さがわかる言葉を見つけてください。

C (読む)

T (朗読) 「そこで、残雪がやってきたと知ると、今年こそはと、かねて考えておいた特別な方法にとりかかった」

はい、そこまでにあった人

C (多数)

暢子 「かねて考えておいた特別な方法」

T その中のどこ？

貞幸 『かねて』

T そう、この中でも特にこのことば(かねて)にじいさんの『今年こそは』という気持ちもつている。

暢子 前から、残雪にじゃまされて、一匹もとれんようになったやろ。ほんで、それをくやしがつて、前から考えといたん。

T 『かねて』は、「前から」という意味やね。

智美 ずうっと前から

T いつころから？

和幸 夏ぐらいから、

力 去年の冬から

T 去年やられてから今年くるまでのあいだ、ずうっと考えてたんでしょやね。

はい、それから。

智子 『特別な方法』今まで失敗してきたけど、今度こそは、絶対とるという気持ちがあるさかいに、あたらしいしかけ。

真人がんにとって一番最後の方法。

亜紀子 『やってきたと知ると』てな、なんか、知るとすぐ特別な方法にとりかかったさ

かいに。

T まちかまえている、という感じがあるのね。
力 この時を待っていた。

T うん。それと、今『特別な方法』というのもでているんだけど、
特別の反対は？

C ふつう

T ふつうの方法というのは？

C 鉄砲でバーン。

T そうそれが、ふつうの方法やね。ふつうの方法では絶対とれない。だから特別な方法。
……

それから？（T 続きを朗読）

浩生『ひとばんじゅうかかって』

C s 同じ！

C はい、なぜ、ひとばんじゅうかかったのでしょうか。美豊子おじいさんは、残雪にひとあわふかせてやろうと思つて、眠いのもがまんして作つてる

チャイム

T じゃ『ひとばんじゅう』のじいさんの思いは次の時間にやりましょう。

【前時の続き】

ひとばんじゅうかかって

T ちよつと昨日の整理するね。

じいさんが「今年こそは」という強い気持ちで文章のどんなところにでているかということについて、いくつも出してくれたね。

亜紀子がいつてくれたのは、『やつてきたと知ると』きたらすぐ準備をはじめたということとは、まちかまえていたんだということ。

それから、貞幸がいったのは、『かねて』

残雪がきてからじゃない。残雪が来る前から、考え続けてきた特別な方法。

前の時間に出ていたのは、こんなところでした。

（板書）

こんなふうには、言葉のつながりを考えて下さい。

そのなかに、昨日の終わりがけに出ていたのが、

『じいさんは、ひとばんじゅうかかってたくさんのうなぎつりばりをしかけておいた。』

ここにもじいさんの気持ちがでていてという人がたくさんありました。そのところも
うすこし、みんな考えてみましよう。

ここから、どんなじいさんの気持ちを感じられるか、どんな姿がうかんでくるか。美豊
子

美豊子 おじいさんは、がんをとって、残雪をひとあわふかせてやろうとおもって、ね
むいのをがまんして、ひとばんじゅう作った。

Tうん。ひとばんじゅうということは、徹夜ですね。朝があげるまで、ねむいのをがま
んしてやってる。そこに必死さを感じられるね。

裕幸 あの、なんか『ひとばんじゅうかかって』のところで、おじいさんががんをぜった
いとるぞという気持ちでている。

真人 あんな、ひとばんじゅうかかったのは、ずっとまえからとれなかったで、そやで、
ひとばんじゅうかかった。がんをとろうと思って。

Tくやしさね。それが、ひとばんじゅうかかってでもやらせた。

貞幸 うんとな、おじいさんは、がんがとれるまでな、しかけ見てるん。

暢子……………

Tもう少しじいさんの姿をうかべてごらん。

例えばじいさん、どんな顔してやってると思う？

…………… 読んでみるよ。(朗読)

どんな顔が浮かんでくる？…………… 疲れた顔か？

こわいような顔か、それとも、にたりにたりした顔か……………

真ひと そんなよゆうないわ。

勇也ひとばんじゅうかかってたくさんのうなぎつりばりつくったやん。ほんで、ひと
ばんじゅうかかって作ったやで、一匹はかかってほしい。

Tほうすると真剣？(勇也うなずく)

保 今まで全然つかめんかったでな、もう、ずっとこの方法考えてやったやん。ほやさ
かい、どうにかそれを成功させたい。ほんで、真剣な顔。

T 長い間考えた方法だから、失敗がないように、うんと真剣に、ていねいにやってい
る。

大輔ひとばんじゅうかかるんやで、ほれだけ残雪が大切なん。残雪だけが敵なん。

浩生 毎年がんとれんので、今年は一匹でもとりたいで、ひとばんじゅうかけて

T智子も、ここ書いといたね。ちよつと言って。

智子 夜寒いのもわすれて、作るのに一生けんめいになっていて、なんかほかのことで
よるかかってやっっているのなら、ひとりごとをいうかもしれないけど、もう作るのにいっ
しょうけんめいで、一言もしゃべらへんC聞こえへん

智子(もう一度いいなおす。)

Tふつうの仕事なら、「ああえら」といいながらやってるかもしれないけど、この時のじ
いさんは、真剣で一言もしゃべってなかった。

ほと、みんな、真剣なじいさんを思い浮かべているひとが多いね。

「ちがう」いう人ない？

幸則 ちがう！

ぼくは、これで残雪にひとあわふかせられると思って、ニタニタしている。

T おもしろいね。みんな、こわいような、真剣なじいさんを思ってる人が多いけど、あいつはニタニタ。

C ぼくも同じ

亜紀子 「なんだかうまくいきそうな気がしてならなかった」てな、残雪をつかまえることとはな、80%ぐらいはな、つかまえられるんじゃないかなと思ってな、期待していたみたい。

裕幸 なんか、今まで残雪にやられてきてたやる。で、なんだかうまくいきそうな気がしていたんやでな、今度こそはな、残雪にひとあわふかせてやるぞと思ってるな、もう成功したみたいニヤニヤしてるん。

真人 あの、おじいさん、特別な方法やでな、ぜったいかかると思ってる

T じゃ、ひとつ聞くけど、さっき亜紀子がいった

『なんだかうまくいきそうな気がしてならなかった』

力 よほどそのしかけに自信を持っている。

T そういうことですね。その自信が生まれてきたのはこの方法を思いついた時ですか？

(Cちがう) いつですか？

今までやられっぱなしだったじいさんが「今年はずまくいくぞ」という、そういう気持ちはどこで生まれたの？

C ひとばんじゅう(多数)

T どうして？

C ……

勇也 ひとばんじゅうかかってたくさんのうなぎつりばりを作ったやん。ほんで胸をわくわくさせながら、今度は一とあわふかせてやるぞで

T うん、そうなんだけど、夜、しかけているときに自信がわいてきたというのは、どういうこと？

真人 明日には、もう成功させる。

力 うんとな、智子ちゃんがいうてたんやけどな、ひとばんじゅう、いやいややってたらひとりごとでも言う、て言うてたけど、これは、その時に自信がわいてたさかいに、一生けんめいやったん。ほやし、残雪には、絶対負けられへんという気持ち。

真人 できあがつてくることにうれしいの。

T おっ、すごいこという。

真人 あのな、ひとばんじゅうかかって、できることにな、あのかかる感じがするん。

T わかる？ええことゆうてやるやん。

C わかる！

幸則 完成に近づくほど、自信がわいてくるん。

T もちろん、この特別な方法を考えたときにも

「ようし！」という気持ちはあったでしょうね。それが、もうひとつここで(ひとばんじゅう)でふくらむ。今、真人は、その計画がいよいよ実行して、仕上がっていくたんびに、自信もわいてくる。

わかる？……少ないね。真人、もういつぺんもつとくわしく言うてみ

真人特別な方法を思いついた時は、ほんなにもふくらまへんかってな、どんどん完成してくるほどにな、ふくらんでくるの。成功か近付いてくるの。

先が見えてくるの。
力あんな、これな、ねんとやってるやん。前考えてた時はな、これはたいがい成功するやろと思ってたけどな、作ってた時にはな、ほのときになんだかうまくいきそうな気がしてきたん。

Tうん。実際にくいを打って沈めてみると、もう糸は見えなくて、たにしだけしか見えていない。これなら絶対残雪に見つかるはずないな、て、また自信が生れてくる。ほうすると、もう一つもうひとつて、

勇也 だんだんひろがる。

T むちゆうになってるうちにひとばんじゆうかかってしまったのかもしれないね。和幸 いっぱいとりたいてな、予定より多くなったんかもしれん。

Tうん、むちゆうになつてね。

そうすると、そういうことが『なんだかうまくいきそうな』につながっていくんですね。その先がどこへいくかというところ。

力 つかめた。

T そう、そこ読んでいきましよう。

明子（朗読）「よく日の昼近く……あたり一面に羽が飛び散っていた」

「ほほう、これはすばらしい。」

じいさんは、子どものような声を上げて

C 口々にじいさんの気持ちを言っている。

T ここのじいさんの姿。むちゆうになつてよろこんでいますね。

勇也 はい、そこいいたい。じいさんは、ひとばんじゆうかかって仕事したやん。それがうまくいったやん。子どもみたいな声でさけんだやん。「ひとばんじゆうかかってした値打ちがあつてよかつたなあ」と思つてな子どもみたいな声出して喜んだん。

T 〇くらいのおじいさんが、子どものように喜ぶなんて、よっぽどなんですね。そのよっぽどのことをするのは、ひとばんじゆうかかってやった。やったかいがあつたなあ！
力 このおじいさんはな、この4年から5年の間、一匹もつかめへんで、このおじいさんは、自分が一番初めにやつた時のようになったと思う。一番初めにつかんだときのようにうれしい。

智士 あ！残雪がきてからな、一番初めにつかんだがん。

智美 力君、4年から5年つかめへんかたつたてゆうてるやん。ほれ、どこでわかるの？

力 いつごろからか

T（そこを読みなおして納得させる）

ほうすると、

①ひとばんじゆうかかったかいがあつた。 板書

②残雪が来てから初めてつかんだ

他に

真人 死んだがんじゃないなくて、生きているがん

和美 えつとな、とつたのはな、死んだのより、生きたままのをとつたで、
Tばたばたと手にあたってくる生きたがん。それがすばらしい。よかった。

『大造じいさんとがん』②

【教材文】

そのよく日、昨日と同じ時こくに、大造じいさんは出かけていった。

秋の日が美しかった。

じいさんがぬま地にすがたを現すと、大きな羽音とともに、がんの大群が飛びたつた。じいさんは、

「はてな。」

と、首をかしげた。

つりばりをしかけておいた辺りで、確かにがんがえをあさったけいせきがあるのに、今日は一わもほりにかかっている。

いったいどうしたことだろう。

気をつけて見ると、つりばりの糸が、みな、ぴいと引きのぼされてある。

がんは、昨日の失敗にこりて、えをすぐには飲みこまないで、まずくちばしの先にくわえて、ぐうと引っぱってみてから、いじょうなしとみとめると、初めて飲みこんだものらしかった。これも、あの残雪がなかまを指導してやったにちがいない。

「ううむ！」

大造じいさんは、思わず、感たんの声をもらしてしまった。

がんとか、かもという鳥は、鳥類の中で、あまりりこうなほうではないといわれていたが、どうしてなかなか、あの小さい頭の中に、たいしたちえをもっているものだなということを、今さらのように感じたのであった。

★情景描写の叙述に心情を読む

「大造じいさんとがん」には、情景描写にじいさんの心情を重ねて表現しているところ
がいくつもある。これまで、心情の追求は人物の行動からさぐる中心であったが、
この教材で心情追求の目を広げさせたいと思った。ここでは、「秋の日が美しかった」と
いう情景描写の中にこもるじいさんの自信、満足感を読み取らせようとした。

そのよく日、昨日と同じ時こくに、大造じいさんは出かけていった
◎この時のじいさんの気持ちの追求

Tでかけていく時のじいさんの気持ちは、昨日と同じですか、ちがいますか？
力同じです！

C s ちがう。

T その問題を自分で考えながら、始めから読んで下 さい。

C 読む

T はい、読んでみてどう？

保 先生、昨日のじいさんがどういう顔でにたにたしていったかがわからんと、考
えられん。

T ああ。

きのうは、『じいさんは、むねをわくわくさせながら、ぬま地に行った』て書いてる
ね。

そして、今日は「きのうと同じ時こくにでかけてい った』

じいさんは、昨日と同じ顔で、同じ気持ちで出かけていったか、それとも少しかわつ
たものがあるかどうか、という問題。

C (力以外は、みんな『ちがう』という方に挙手)

T じゃ、どこがどういふうにちがうのか、いっても らいます。そのまえに、保、「そ

こで残雪がやって きたと知ると」から読んで。

保 読む

T じゃそれぞれの意見を言つて。

智美 どう？

智美 ……

T きのうちといつしよ？ちがう？

智美 ちがう。

T どうちがう？

智美 ……

T 弘子どう？いつしよ？

弘子 ちがう。昨日はな、一わつかまえたけど、残雪がまたどんなこと考えてるかわか
らんで、ちよつと心配。

T なるほど。

「昨日よりちよつと心配」(板書)

弘子さんに似ている人ある？

真人 『たかが鳥のことだ』で……………あ、ちがうわ。 ぼくは、「いっぱいとれる」と
思つてる。

T どういうこと？もうちよつと言つてくれる？

真人 『たかが鳥のことだ』で、すぐにわすれてな、昨日よりいっぱいというなぎつりばり
しかけておいてな、たかが鳥のことだで、な、もうわすれて、いっぱいとれると思つて

る。

T ああ、二つ全然ちがう意見が出ましたね。

弘子は、「あの残雪のことだから」とちよつとしんぱいになつてる。

反対に真人は、「きのうよりもつとつぱいとれる」という気もちになつてるといふ。

智美はどつちに近い？

智美 まあちゃん。

C まあちゃんの方に近い。

T どこからそう思う？

菜穂子は？

菜穂子 ……

T そこを見つける力が大事なんだね。なんとなくこう思うんだけど、それが文章を読んでわかるところないかなあ、て考える。

だれか、見つけた人。「ここから言えるやんか」て美豊子「きのうよりもつとたくさんうなぎつりばり」をばらまいておいた」

T ほこがどうなん。

幸則 ほこからな、「もつとたくさんうなぎつりばりをばらまいておいた」て書いたるやろ。鳥がもつといつぱいひつかかるやろと思つてな、もつといつぱいばらまいた。

裕幸 うんとな、昨日はな、じいさん、それまでとれてへんかったやろ。ほんで、昨日とれて、ちよつと自信がついてな、ほれと、もつとたくさんうなぎつりばりをまいたんやろ。ほんでな、昨日成功したで、今日も、もつとたくさんうなぎつりばりをばら

まいたでな、2わぐらいつかめてるんちがうかなあつて、思つてる。
T 「もつとたくさん」からじいさんが自信をつけてい ることが読みとれる。

はい、もつと他の所から見つけた人ある？

幸則 ぼくは、『たかが鳥のことだ、ひとばんたてば、またわすれてやってくるにちがいない。』のところでな、『たかが鳥だ』て、馬鹿にしてるやん。よっぽど、つかめる自信があつたん。

C s いつしよ

善崇 『たかが鳥のことだ』……………ほの時はな、あの な、つりばりがついてへんのとついてると見分け がつかへんと思つてな、ほんな、見破る方法がんに は思いつけへんと思つてな、だから『たかが鳥だ』T たかが鳥に見破れるはずがない、という気持ちがある。

だから、きのうよりつと自信をもっている。

真人あんな、昨日も残雪に勝つたんやでな、今日もいつぱいつれて、昨日は一わだけやつたけどな、今日は、もつとつかんで、残雪をひとあわふかせてやろう。T うん。……………まだ別のところから見つけた人ある？ C ……

T じゃ、弘子が言つたんだけど、「ちよつと心配だなあ」という気持ちも心のどこかには、ちよつとはあつたんでしようか。 全くなかったでしようか。

C ほんのちよつとはあつた。

T そんなのかけらもない、という人。不安みたい全く ないという人。C なかつた！

T 読んで考えてごらん。どこでそれが言えるか。

真ひと ぼくは『秋の日』のとこやと思う

T 留美、どう？

留美 ……

T 自分はどっちか、てはつきりする！

志穂

志穂 心配もあった。

『がんの群れは、これに危険を感じてえ場を変えたらしく、付近には一わもいなか
った。』

T うん……。志穂はえらいね。自分でしようこを 出してきた。『がんの群れは、こ
れに危険を感じて え場を変えたらしく、付近には一わもいなかった』 がんのやつも
考えてるな、という気持ちがある。

他の人。智士

智士 ぼくはな、なかった。あのな、あつたらな、ほんな、『わくわく』とかしいひん。

T うん？二日めは、「大造じいさんは出かけていっ た」としか書いてへんよ。『わく
わく』とも書いてない。

智士 大造じいさんはでかけていったんやろ。ほんでな、出かけて行くのに、心配やつ
たら、「心配やなあ」とか、書いたるやん。

T 書いてない。だから心配はなかった。

大輔 うんとな、『たかが鳥のことだ、ひとばんたてば、またわすれてやってくるにちが

いない』と書いたるやん。ほんでな、そんな心配はもうないのちがうの貞幸『大造じい
さんは、今度はうまくいきそうな気がしてならなかった』て書いたるやろ。ほんで。

亜紀子『じいさんは、「はてな。」と首をかしげた』

「はてな」というのは、どうしてかなという言 葉やさかいな、心配とかがあつたらな、

……

力 後を読むよりも、もつと前の方で考えたほうがいい。

T うん。そうだね。ただ、今亜紀子が言ってるのは 不安がなかったから、『はてな』
わけがわからない という気持ちになるんちがうか、ていうんやね。もし、不安があつ
たら、「あつやっぱり」とかそんな言葉になるんちがうか、てね。

力 始め、幸則君らがな、昨日よりいっばいというたやん。もつとたくさんうなぎつり
ばりをしかけておいたということは、やつぱり不安がなかったで、じいさんの気持ちは
自信に満ちていたというか、自信がいっばいあって、もうぜったいつかまえられると思
つてたしな、幸則くんらが『たかが鳥のことだ』て言うてたやん。ほやさかい、馬鹿に
してるんやさかい、やつぱ、なかったと思う。

T うん。……でも志穂のをどう考える？

『これに危険を感じてえ場をかえたらしく』

大輔 でも、あとに『しかし』て書いたるさかい。

T 『しかし』があるね。心配になってもいいんやけど『しかし、大造じいさんは、たか
が鳥のことだ』というんだから。

真人 大造じいさんは、自分のしかけを信じてるん。

力 自信に満ちているん。

T 『これはすばらしい』というのがありましたね。

『おれのしかけはすばらしい。』と読んで人がいましたね。あんなにやつつけられていた残雪だけど、

『たかが鳥よ』って

C もうこわくない。

T ね。こういう心配はまったくなかったんだ。そのことがわかる言葉がまだあります。さがしてごらん。

じいさんは、ひっかからないなんて心配は全くしていなかったということがわかる言葉。勇也 問題がまだわからへん。

T じいさんはね、出かけていくときね、かかってないかななんて心配、全然してなかった。そのことがちゃんとわかる文章がある。

明子 うんと、『またわすれてやってくるにちがいない』てかいたるでな、もうじいさんは、ぜったいわ すれてやってくると思ってる心配してない。

T いいですね。「やってくるだろう」じゃなくて、「やってくるにちがいない」だから。保 「秋の日が美しかった」

前はな、景色は目に入ってなかったやん。しかけが 気になって。ほやけど、今はしかけはひっかかって ると思ってるさかいな、あの、景色が目に入って余裕があるの。真ひと 自信がつきすぎてな、もう余裕持ってるの。

T 一日目は、そんな余裕がなかったんだけど、自信がついて、余裕が出てきたから、「秋の日が美しかった」て、ながめる余裕も出てきた、いうこと？

勇也 はよう言うて、「うれしい」ということよ。

ずっと前は、いろいろ心配とかしてたやん。ほやけど、今は、ちよつと取れてきたし余裕もあるやん。ほんでうれしいの。

T ほう。余裕もあって、うれしいから、『秋の日が美しく』見える。

わかる？ここには、じいさんのうれしい気持ちが出ている。自分がうきうきとはずんでる時は、まわりも輝いて見える、そういうことあるでしょ。

力 『秋の日が美しかった』はな、じいさんが自信に満ちている気持ちやと思う。気持ちをあらわしていると思う。前は、つかみにいって、いくら外の景色がきれいかつてもよ、きたないかんじがする。この時はもうつかまえる自信がわいていたから、「おお、きれいやなあ」て見てる。

T これから先も、景色の所に注意して読んでいくとおもしろいですよ。ただの説明じゃなくて、そこにもじいさんの気持ちが出ています。そういう目で読んでいくといいね。

じゃ、ずいぶん時間がかかりましたがねやつと出発のところはできました。

次のところ、佐夜子読んで。

佐夜子 朗読

「ううむ！」

大造 じいさんは、思わず、感たんの声をもらしてしまった。

勇也 先生、これわかったで。なんでピーンとはってるか。
T おお。なんでや。

勇也 あのな、つなげたとこにくちばしもってきて な、くちばしで、後ろとか前にやってな、ピーンと やって、はりがついてきたらな、こらあかんと思って。

T うん。見破り方ね。ピーンと引張ってみて、とちゅうでとまるやつは、「こらあかん」。ひっぱってもどうやってもだいたいじようぶなやつは食った。

力ほなら、むちやくちや長うしといたらよかったんや ほんなら動かへんで。

T 板書

『はてな』

『いったいどうしたことだろう』

『ううむ!』

「感たんの声」て、どういう意味だった？

力 すごいと感心してほめること。

T ほめてるわけでしょ。じいさんと残雪はたたかう 敵どうしでしょ。この時、『ちきしよう、やられた』というくやしきは、

C ない!

T ないんですね。自分の自信まんまんの作戦を破られて、くやしがつて当然でしょ。と

ころが、じいさんは、「思わず感たんの声」

これは、いったいなぜでしょう。

ちよつと自分で読んで考えてごらん。

勇也 先生、これうれしいのかあ？

T 感心してるんよ。変でしょ。どうして？

C ……

T なんですか、さっぱりわからんいう人

C 7〜8人挙手

T なんとなく考えが浮かんだ人。

お、和美。えらいね。自分で手を上げた。

和美 うんとな、ふつうの鳥やったらな、つりばりのさきにつけたのにひっかかるのにな、この鳥はな、ちゃんと、ぐつとひっぱっていじようがないとみとめてからな、初めて飲みこんださかいな、よく自分でもわからへんでな、

T うん？自分でもわからん？どういうこと？
自分って。

和美 大造じいさん

T ほう。自分でもわからん。

和美 小さな頭の中に、よくほんな、思いついたな。

T はい。今和美がとても大事なこと言った。あれ、ヒント。

勇也 じいさんはな、こうやってたませたるのにな、なんでかしらんけど、見たらピ

ーソンとはってたでな、なんかおどろいてな、自分にもわからへんしな、でTそこ、もうちよっといって。自分にもわからへんて

真人 自分にもな、こういうふうにはーソンとのぼしてとられるとは、思ってたへんかった。智子 自分でしかけを作ってた、ほんでほの時、自分は自信があったさかいに、こんなこととして見破られると思ってたのになかったのに、たかが鳥のことだつて馬鹿にしてたのに、残雪がそういうふうに見破つたさかいに、自分でも考えられなかったさかいに。

T 今いうてやるのは、こういう見破り方があることをじいさんは知っていたか、いなかっただか。

C 知らなかった。

T 知らなかった？どこでそんなことが言える。

じいさん自身、こんな見破り方があるなんて頭になかった、てことがどこでわかる？真人『はてな』

智子 『いったいどうしたことだろう』

T わけがわからないのね。じいさんの頭では、えさを食べればひっかかるはずだ、て思ってるのね。えさを食ってるのにひっかからないはずがないわけでしょ。この作戦では。それなのに、一匹もおらん。わけがわからないんですね。

力『かねて考えておいた方法』やでな、つかみ方はわかっていても、やぶり方はわからなかったと思う。このたたみ糸は、どんな糸かわからんけどな、やっぱり水のなかにしずめたらな、どんな糸でもわかりにくいと思うし、しずめたる時はな、自分でも『これはすばらしいしかけだ』て感心してる。

T だれか、さっき「このじいさんあほやな、もっと糸長くしといたらよかったのに」て言ってたね。なぜ長くしなかったの。

力 がんを馬鹿にしてたで。

大輔 糸がなかったで。

T そうですか？

智子 そんな見破り方があると思っていなかったから

T そう、頭になかったからですね。もし頭にあつたらもっと長い糸にしたでしょうね。勇也 はい、ちよっと。

今年こそは、てがんばつてずつとやってとれてきたやん。ほんで、同じ時間に行ったやん。ほたら、とれてへんかったでな、どうやってとれんかったんやろうな、いったいどうしたことだろうて考えながらな、

T じいさん、ここ考えてるんよな。わけがわからない。なんでやろ、見破れるはずなのに、なんでかな、て見ると、糸がみんなーソンとなっていて、それで、やっどじいさんにもわかったわけですね。じいさんがうんとかんがえてわかったことを残雪は、たった一回で見破ってしまったわけですね。力だから、『うーむ』て感心したんや。

チャイム

大造じいさんとがん③

◎二年目の残雪を見る目はどう変わったか。

そのよく年も、残雪は、大群を率いてやってきた。

【授業記録】

T「そのよく年も残雪は大群を率いてやってきた。」じいさんが、つりばりの計略を見破られた、そのよく年も残雪は、大群を率いてやってきた。

これを見ているじいさんは、やってきた残雪をどんな思いで見ているだろうか。

C……………

T考えて。

浩生 また来たのか。

T はい。そういうふうに出して下さい。

貞幸 今年も残雪は、……………今年も残雪を……………つかむ

T 佐夜子どう？

佐夜子……………

勇也 また残雪がやってきた。

真人 また残雪と戦える。

真ひと 去年残雪にやられたから、今年こそはと思っている。

T 佐夜子どう？もう思いついた？

佐夜子 今度こそ。

T 今度こそ、ね。

じゃ、聞くけど、去年、やってきたね。その時じい、さんが残雪をむかえうつ気持ちと、今年、この残雪、を迎える気持ちは同じでしょうか、ちがうでしょうか。

Cs ちがう！

T どうちがう？

哲郎 去年失敗したさかいな、今年こそは、ぜったい一匹はとってやろう。

Cs 聞こえへん！

T もういっぺん言って。去年の失敗があるからどうだって。

哲郎 今年も、そういう失敗しんと、ぜったい一匹はとってやる。ていう気持ち。

T 1 分間時間をあげるから、去年の残雪を見る目と、今年残雪を見る目は、どちらがうか。1 章にもどって考えてごらん。

C 読む

T 去年の残雪を迎えたときのじいさんの気持ちは、こう書いてますね。

「大造じいさんは、このぬま地をかり場にしていたが、いつごろからか、この残雪が来るようになってから、一わのがんも手に入れることができなくなったので、いまいましく思っていた。」

(勇也 あ、わかった!) その気持ちと、今年とどちらがう?

勇也 いっごろからか、この残雪が来るようになってから、一わのがんも手にいれられへんやん。ほんで、おじいさんは、「そのよく年も残雪は大群を率いてやってきた」てな、大造じいさんは見たやん。今度はぜったいとするぞ。

T ほと、お前は、ぜったいとするぞ、という気持ちで 去年よりつよくなっているということ?

勇也 (うなづく)

真ひと 去年はいまいまして思ってたけどな、今年は、ライバルというか、そういうふうにつきあおうと思ってるな、見てたの。

力 ちがうとおもう!

T ちよつと待って。みんな、今真ひとの言ったことが わかったの? まず、真ひとの言ってることがわかって、それからちがうかどうか考えるんですよ。

真ひとの言ったことわかった?

C わからん。

T もういつペン言ってる。

真ひと えっとな、去年は、いまいまして思ってたやん。そやけど、今年にはライバルというかな、

(勇也 ライバルというの、説明してくれや。)

どう言うたらよいかなあ。友達というわけではないんやけどな、どうしてもやつけたたいんやけどな、いまいましてじゃなくてな、なんかなあ、仲間というか、やつけた

いんやけど、ほういうなん。

T 善崇、わかる? (うん、だいたい) じゃ、ゆうてみ。

善崇 去年までは、いまいましておもってたけどな、なんでかしらん、ことしになったらライバルみたいに思ってる。

C ライバルでどういう意味?

T うゝん。真ひとは、大変大事なことを言ってるって先生おもうんだけど、だれか、もう少しはつきり言えませんか。

真ひとは、いまいまして違う見方で今年は見ているとゆうてやるんや。

幸則 最初は、がんがつかめへんで、いまいまして思ってたけど、自信を持ってた方法が破られていくうちに、さすが残雪やと思ってる、たおしがいがあると思ってる。

T ほれ、だいぶんわかってきた。

C (いろいろつぶやいている。)

T 「いまいまして」とは、どういう見方なのか、ライバル」というのは、どういう見方なのか、そこをもうちよつとはつきりしなあかんね。

裕幸 「いまいまして」というわけがなっとくしてから 考えたほうがわかりやすい。

T うん。「いまいまして」というときは、残雪をどんな目でみているの?

C はらが立つ

C にくたらしい。

勇也 こにくたらしい。

T そう、こにくたらしい。それは、どういう感じなのという相手に対して、「こにくた

らしい」と思うの？

C…………

勇也 ぼくらでも文句いわれた時に

T だれにもんくいわれたときははらたつ？

おとなにしかられた時か？

和幸 自分より下のやつ

保 自分より年下というか、ほういうやつにもんくいわれたときははらたつ。

幸則 あつ、ほんで…………

T もちろん、だれにもんくいわれても腹がたつけど保がいったように、自分よりちつちやいやつにばか にされたとき、はらがたつでしよ。

智士 はらたつ！ 晁ね、行ったときに

Tそれが「いまましい」や。

真ひと ああ、わかった！ もう言える。

えつとな、前は、いまましいと思ってたけどな、いまは、…………あの、小さいでいまましいと思ってたやん。小さいやつにやられてるで。でも今はな、小さいけど、知恵があつて、自分と同じか、それより上やと思ってるでな、ほんで、いまましい、というよりな、なんか、やつつきたいというだけ、な、やつつきたいというだけ。

T わかつてきた？

幸則 わかった。

勇也 ちよつとだけとりた、いう気もあるけどな、一回やつつきたい、いう気がたく

さんあるの。

裕幸 前はな、じいさんは人間やろ（C笑い）

ほんで、残雪は、鳥やろ。ほんで、人間が鳥に馬鹿にされてるのは、なんか、下のもんにいじめられ、てるみたいで、鳥に馬鹿にされてるようだったから、な、なんか、こにくたらしいやろ。ほやけどな、今年になつたらな、じいさんといっしょみたいなの。知恵がでてきてるでな。この前、二日目のとき、じいさんが見破られると思つてんかったことを見破つたやろ。特別な方法を。ほんで、じいさんは、残雪もじいさんと同じくらしいの知恵もつてるんかなと思つてな、ライバル。

T ライバルというのは、自分より弱い相手には言わないね。自分よりはるかに強い相手にも言わない。ちよつと自分と同じぐらいで、どっちが勝つか、というような相手をライバルと言う。

だいたいわかった？ 今裕幸がかなりはつきりと言ったんだけど。晃典、どう？

晃典 あのな、おじいさんがな、残雪は鳥やん。大造じいさんは人間やん。人間がな、鳥にばかにされてるでにくたらしい。

Tうん。じいさんは残雪を自分より下のやつと見ていた、一年目は。それは、文章のどこに出ている？

さがしてごらん。

C（口々に見付けた所を言っている）

T見て回っている。

T じゃ、和幸。言つて。

和幸 「なかなかりこうなやつ」

なかなか、やでな、自分より下やと思ってる。

保 あのな、自分よりかしこい、とか、自分とあんまりかわらへん時はな、「ものすごくりこうなやつで」というような言いかたするけどな、じいさんは、残雪のことを「なかなかりこうなやつ」てな、まだ、自分より下やと思ってるでな。

T うん。ここにはつきり出ていますね。

鳥 鳥にしては、なかなかようやりよるなあ、という感じでしょ。

T もちろんかしこいのはみとめてるけど、おれよりも、という気持ちは全然ないわけでしょ。

はい、まだある。この言葉の中に。だれか、気がつかない？

なかなかりこうな……

Cs やつ！

寛子 自分より上の人やったら、「やつ」なんて言いかたしいひんけどな、自分より下と思ってたさかい「やつ」

T ね。

まだ、他にある？

力たかが鳥

りこうなやつ といっしょで、「たかが」

真人 まあ、ふつうの鳥みたいなもの。

T ここで（なかなかりこうなやつ）こういう気持ちがあるから、一わ取れたときに、ほれ、やつぱり「たかが鳥よ」という気持ちになるわけでしょ。

力 鳥が人間よりすぐれてるわけがない。

まだある。「もっとたくさんのつりばりをばらまいておいた」

幸則 残雪をかしこいとおもってたら「二度とこんな手はひっかからんやろな」と思うけど、残雪をばかにしてたら、たくさんばらまいておいた。

T そういうじいさんが、今年は、そうは見えていない。どこで変わったの？じいさんの残雪を見る目は。

C 「ううむ！」

美希 『「ううむ！」大造じいさんは、思わず、感たんの声をもらしてしまった。』

和美 ふつうの鳥だったら、ひっかかっているはずのがなが、つりばりの糸を調べてのみこまなかったさか いな、じいさんが自分でもわからないのにな、残雪はひっかからんと……

T じいさん自身が気がつかない方法で見破った。

力 その次を読めば書いてる。「がんとか、かもとかいう鳥は、鳥類の中で、あまりりこうなほうではないといわれていたが、どうしてなかなか、あの小さい頭の中に、たいした知恵をもっているものだな、ということは今さらのように感じたのであった。」

貞幸 ぼくといっしょや。

C 「たいした」

T そこやね。

真人さつきは、「なかなか」やったのにな、今度は、「たいした」
T そう、「なかなか」から「たいした」になったんだね。すごいこと見つめましたね。
裕幸 「いまさらのように」

T うん、もういっぺんあらためて、という意味ですね。ここでじいさんの残雪を見る目がぐっと変わった。

ほと、始めに真ひとが言ったことは、もうわかった。かな。もう、じいさんは、自分より下のやつという。のではなく、自分の全力をかけてたたかう相手として見ている。

C ライバル！
T そういう目で、今年の残雪を迎えている。

さあ、じゃ、そういうおれのライバルというつもりで迎えている。それは、じいさんのどんな行動の中に出ていきますか。

それを見つけて下さい。

C 読む（見つけた、と口々に言っている。）

暢子 「夏のうちから心がけて、たにしを五俵ばかり集めておいた。」

ふつう、がんで 秋の終わりから冬にかけて来るやる。ほやけど、じいさんは、夏のうちから、もうたにしを五俵ばかりとつといた。

C はやく捕りたいの。

和幸 ばかにしてるんやったらな、ほんなはようから 準備しいひん。

明子 夏のうちからも五俵ぐらいつととかんとな、残雪には勝てへんと思ってるから。

T ああ。ほと、「夏のうちから」には、

はやくやつつきたい、というのもあるし

そのくらいから準備しないとともかなわない、

真人 一俵ぐらいやつたら、残雪に勝てへんでな、五俵も集めてな、がんとたたかう。

T 「五俵」ここに感じた人ない？

智士 あんな……………

T 一俵が8 kg。五俵で三百 kg。すぐに集まったでしょうか。C 集まらへん

智士 一日では集まらへん。ほこらには、いよらんやん。

真人 新鮮なやつを

T ああ！毎日ひろい続けて三百 kg 集める苦労のほかに 今、真人が大事なこと言った。

真人 新鮮なやつやつたら、がんが気に入って食べて くれよる。

T ということは、死んだたにしではあかんのですね。夏から冬まで、三百 kg のたしをしをどうしていたの。C ほら、水かえたり

C きれいな水にしとく。

T 生かしたかなあかんわけですね。

C くさったやつはあかん。

T 夏の暑いときから冬までずっと生かしておいた。

それが一つ。

和幸 まだある。『ばかり』ふつうやったら『五俵も』て書いたるけど、『ばかり』やで、

残雪やったら、これくらいでは、もっといるかもしれないと思ってる。力、まだ足りひんかもわからん、という気持ちがある。T なるほどね。しんちようなんですね。勇也 夏の暑い時から拾ってるやん。ほんで、これでとれたらいいなあ、と思ってる。T はい、じゃ、あと3分ですから今日の学習のまとめをノートに書いて。

【ノートから】

加藤 和幸

ぼくは、今日、初めてわかったことがいっぱいあった。はじめは、真ひと君のライバルがわからなかったけど、だんだんわかってきたのでよかった。それから「夏のうちから」でも、いろいろなことがわかった。自分で考えるより、みんなで考えるほうがよくわかった。

本田 幸則

きょうの学習で、ぼくは、じいさんの気持ちとかを考えなくて書きこみをしているけど、真ひとくんがいったように、じいさんの気持ちが変わっているということを知ってやった方が考えやすいしよくわかると思った。

藤田 菜穂子

大造じいさんと残雪は、ライバルといった真ひと君はすごいと思った。私は、そんなことは、はじめ思わなかったけど、あとからわかった。なかなかりこうなやつで、とかいてあるが、なかなかは、たいへんりこうなやつで、じゃないから。大造じいさんと残雪は、先があらそえる人たちだと思ふ。

森田 美希

始め、真ひと君のライバルという所はわからなかった。自分でもわからなかったのによくわかったなと思つています。1章の「いまいまして」にもどつて、やつとわかりました。いまいましては、はらが立つとか、そういうのにある。もつともいやなのは、自分より下の子に言われるのが一番いやになってくる。私としたら、三年のゆうじやたろう、など、いっぱいいいやなひとがいて、はらがたつてしかたがないけど、大造じいさんの場合、人間と鳥だから、下だと思つていたけど、今年になって、りこうだし、たいしたに変わったから、ライバルのなつたといつたから、だいぶんわかつた。みんなといつしよに勉強してわかつてよかつた

藤谷 明子

真ひと君が、今年の大造じいさんは、残雪をライバルといった。私も、前に、方法をみやぶられたから、「なかなかりこうなやつ」から「たいしたちえ」になつたから、ライバルとして、今年、残雪をたおそうと思つて、大群を率いてやつてきたのを見ていたと思う。夏のうちから心がけたのは、前のショックのせいもあるし、これぐら

いからしないとまた、まけるからだとは考えた。

久木 美豊子

はじめ、私は、真ひと君のライバルという意味は、あまりわからなかったけど、大造じいさんは、はじめ残雪をたか鳥のことだとか、なかなかこうなやつで、とかで、ライバルと考えていなかったし、それに、かんとんに、この残雪をまかせることができると思っ

ていたことがわかった。
2の場面は、ライバルということがわかった。それから、大造じいさんは、たにしを五俵も集めて。なんとしてもがんとりたいと思っ

ていたと思うし、でもたにしを五俵も集めたか

北川 力

残雪は自分とおなじくらい

のちえのもちぬし。
真ひと君が「ライバル」といったとき、なんでやろうとおもったけど、よんでたらわかった。すごいいきごみやと思う。かとう君が「ばかり」といったとき、「うん、そうや。」と思った。

西山 智士

真ひとくんのいけんは、わからなかったけど、わかってきた。ライバルがいてること

がわかった。

五俵ばかりのところで、一つ一つに心がこもってるのと思う。

安田 裕幸

去年は、なかなかこういうやつで、とか、たかが鳥のことだとかいっていただけで、じいさんは、がんとかかもとかいう鳥は鳥類の中であまりこうでないのに小さい頭の中にたいした知恵をもっているのだな、と今さらのように思ったのだから、何か残雪に目をさまされたというか、全力でぶつかっていかなければだめだなど思っている。

【10月24日（土）】

『大造じいさんとがん④』

『会心のえみをもらした』を読む

【授業記録】

T きのうち一時間かかって勉強したことは、去年の残雪を見る目と今年では、全然違う

ということ。

いまいましいやつ、というようなものでなく、おれの全力をかけて戦うライバル。その意気込みがどこに出ているかといったら、「夏のうちから五俵ばかりのたにし」というところに出ていた。

今日は、そのじいさんの意気込みが、どんなふうにつながっていくのか、読んでいくことにします。

暢子、「そのよく年も」から読んで下さい。

暢子 朗読

「そのよく年も、残雪は、大群を率いてやってきた。そして例によつて、ぬま地のうちでも、見通しのきく所をえ場に選んで、えをあさるのであった。

大造じいさんは、夏のうちから心がけて、たにしを五俵ばかり集めておいた。それを、がんのこのみそうな場所にはばらまいておいた。どんなあんばいだったかなと、その夜行つてみると、案の定、そこに集まって、さかんに食べたけいせきがあった。

そのよく日も、同じ場所に、うんとこさとまいた。そのよく日も、そのまたよく日も、同じようなことをした。

がんの群れは、思わぬごちそうが四、五日も続いたので、ぬま地のうちでも、そこがいちばん気に入りの場所となつたらしい。

大造じいさんは、会心のえみをもらした。」

T はい、そこまででいいです。

今年の作戦はどういう作戦かわかるね。

智士 うん。たにしをばらまいといて、ほこをバキューンとうつの。

力が がんのこのみそうな所を一つてつぼうの届くところで決めてな、そこを自分の好きな場所にしてしてもて、また来よるやん。ほこをうつの。

T てつぼうの届くところまでは、きよらんかったんやけど、なんとか、そこを気にいりの場所にして、おびきよせて、きよったところをてつぼうでバンとうつ作戦やね。

真人が がんをその場所を気にいらせといてな。

T うん、そこで、今日の問題はね、

「大造じいさんは、会心のえみをもらした。」板書

ここのじいさんの気持ちをうんとくわしく考えてみ たい。

もういつペンみんなに聞くよ。『会心』とは、どういう意味ですか。辞引きを引いて調べてるでしょ。

大輔 心で満足すること

和幸 気持ちのいい笑い方。

裕幸 満足して笑うこと。

美希 心に深く感じること。

幸則 心から気に入つて満足すること

T はい、そのくらい？

ほど、『会心』ていうのは、ただ、うれしかった、喜んだ、じゃないですね。心の底から気持ちがいい。

大輔 わからへんこと。たにしいっぱいばらまいといて、なんでうれしいの？

T うん、そこが問題。これから考えるんや。
で、心に深く感じて、ジーンとくるほど、満足だった、そういう意味がここにあるわけでしょ。

ほと、今大輔が言った、じいさんは何がそんなにも心にジーンとくるほどうれしかったのか。じいさんをそういう気持ちにさせたものは、何なのか。それを今日の一時間で考えましよう。
まず、五分間あげますから、自分の考えをノートに書きなさい。

もう一つ言えば、去年、うなぎつりばりの計略をしかけた時じいさんは、会心の笑みをもらいましたか？ C s ううん。

T 「なんだか、うまくいきそうな」でしたね。ところが、今年は作戦の準備ができたとき、『会心の笑み』なんです。全然喜びの深さがちがうでしょ。なぜ そんなに、ちがうのか。

その前後を読んでノートに書いてごらん。
C 各自で考える。

【ノートに書く作業中での発言】

T 勇也は、本を読んでもね。考えようと思ったら、まず、読むことだよ。

大輔 わかった！

T この内容は、いろいろ考えられると思うよ。

先生、三つぐらい考えたけど、みんなはどうかな。

C ぼく、二つ

勇也 もう一つ書こう

T ひよっとすると2章だけ読んでてもわからんかも しれんね。1章からも考えてみる。

力 ぼく、1章からやで。

T あまりむつかしく考えないで。(留美に)

じいさんうれしかったんですよ。なんでうれしかったんかな、て、すぐわかることから書けばいい

力に。そんなふうには、簡単に書かないで。もっと詳しく。じいさんは、こういうことがあったからうれしかったんだ。というふうには。

C となりどうして考え合う声だんだん広がってくる。

T べつに一人で考えなくてもいいよ。となりの人に意見聞いてもいい。

真ひと 聞いた。

T 作戦がうまくいっただけなら、去年と同じだね。会心の笑みをもらった、にならない

いでしょ。
そこ考えて。

一人ひとりの読みに対して、「おもしろいね」「ここをもっとくわしく」「とくに大事なことは、なんなのか」などの助言を加えている

T はい、じゃ聞いていきましようか。

まだ、とちゅうの人もいるし、まだ、考えつかない 人もいるかもしれないけど、これからあとは、友達 の意見を聞きながら考えていきましよう。

それじゃ、晃典君のからいきましよう。

晃典 今度は、なんだかうまくいきそうで、前よりも自信がある。

C 同じ

和幸 だいたいいっしょや。

T じいさんは、去年の作戦よりもっと自信がある。それは、どこでわかりますかね。

志穂 さかんにたべたけいせきがあった。

ほんで、がんが来たと思つた。

善崇 思わぬごちそうが四、五日も続いたので、ぬま地のうちでも、そこがいちばん気に入りの場所となつたさかいな、ほこしか、きいひんやろと思つてな、きたところをバーンとうつて、取れる、と思つてる。

佐夜子 大造 じいさんは、今度こそがんをつかまえられるとおもつて、うれしくてたまらない。

T 今度こそつかまえられる、ていう絶対の自信があるわけですね。去年以上に。

美希 そこがいちばんの気に入りの場所となつたらしい、て書いたるさかいな、「いちばん」というたらな、ほかのぬま地のところでなくてな、じいさんのとこばかりやしな、じいさんはな、うちやすい

T ほう。えさ場はいろいろあるにちがいないね。だ けど、この中で、じいさんのまいた場所が残雪たちの一番気にいりの場所になつた。

智子 がんたちにとつて一番気にいりの場所になつた から、おじいさんは、がんが来たら、何日も何日も来てたら、もう慣れてここに来るさかいに、うちやすい。

T 確実にここへ来る。だからじいさんの作戦は自信がある。

力 じいさんが心から満足するようになったんは、前一番気にいりの場所ていうのは、なかつたと思うんやけど、それに、一番の気に入りの場所を作つた、いうことは、ぜつたい来る。

T もう一つ聞くけど、じいさん、不安はなかつたの？ 一年目は、『なんだかうまくいきそうな』でしょ。ところが、今年、絶対の自信がある。なぜじいさんは、この場所にそんなに自信があるのか。

C ……

T ヒントは、ここは、どういう場所なのか。

さつき、美希は、うちやすい、といつたね。

和幸 見通しのきくところ！

見通しのきく所やさかいな、がんからもよう見えるかもしれんけどな、じいさんもねらいやすい。

T ちよつと、大きい声で、もういつぺん言つて。

和幸がんなはな、なんか、えさのことと思つてえをあさりに来てるけどな、残雪みたいながんなはな、

力はいはい！

T 今、大事なこといいかけてる。

一番気にいりの場所、て、だれが気に入ったの？

C がん！

C 残雪！

T 残雪ですな。がんに率いている残雪が一番この場所がいいって気に入ったんでしょ。

なぜ？残雪はなぜここが一番気に入ったの？

C s 多数挙手

哲郎 ごちそうがある。

T ごちそうがある。それが一つね。まだある。ごちそうがあるだけで、残雪は、気に入っただろうか。

晃典 見通しがよい！

真ひと 見通しがきいてな、見張りやすい。

力 残雪はな、見通しのきく所をな、さがすやん。ほこが、見通しがきくし、ごちそう

もいっばいある。残雪にとつても、がんたちにとつても、一番の場所なんほんでな、残雪にとつて見通しがきく、ということ はな、じいさんから見通しがきく。

和幸 ほれがねらいやつたんや。

T うん。残雪は、ごちそうがある、というだけでは 決して行かないわけでしょ。危ないところへは、ぜったい行かない。ごちそうがあつて、しかも見通しがきく。それで残雪はうたがいもなく来るようになった。

そこは、じいさんにとつても、ねらいやすい、うち やすい場所なんだ。

勇也 どまんなかをねらえる。

T それが一つ。まだあるんです。

作戦がうまくいっただけじゃない。心がじーんとするほどうれしかった中身はまだ他にもある。

亜紀子 夏のうちからやつた苦勞が少しも失敗しないで、うまくいったから。

真人 いっしょ！

あのな、たにしを五俵も、心がけて、新鮮なたにしを五俵ばかり集めたかいがある。

裕幸 あのな、自分の作戦どうりにだんだんなってきた。

T ちよつと待つて。今、真人と亜紀子が言つたのは、暑い夏のうちから、五俵ものたにしを苦勞して集めた、その苦勞が実つた。これ、ふたつめですな。

もう一つ大事なことを幸則が見つけているんです。

チャイム

幸則 前はたかが鳥と思つていたからかかつて当り前と思つていたけど、今はライブル

と思っっているから、そのライバルがわなにはまったからうれしかった。
T わかる？

貞幸 わかった！

真ひと 前はな、勝ってもな、勝つはずやと思っただけでな、ほういうことは思わんかったけどな、今はな、残雪はライバルやん。ほのライバルにここまでは勝ったやん。ほんでうれしいの。ライバルに勝ったんやで。

亜紀子 おじいさんは、たかが鳥のことだ、と思っ自分より下のやつだと思っただから勝ってもそんなにうれしくなかったけど、自分と同じ力のやつというか、そういうライバルに勝てたから。

裕幸 あんな、前は、たかが鳥いうて、自分より下のように扱ってたやろ。ほやけど、おんなじ力やでな、おんなじ力の相手に勝ったでうれしいの。

力じいさんは、残雪を自分の競争しあってるライバルと思ってるやん。その残雪をな、残雪にわからんようにな、わなにしかけたで、ほれば、残雪に勝ってるんやで、やっぱりその気持ちが一番おじいさんを心から満足させたと思う。

T そう。ライバルを見事にあざむいたんですね。たいへんなやつだと思っただけど、やっぱりおれの知恵の方が勝ったんだという満足。

【10月26日（月）】
大造じいさんとがん⑤

「ううん」とうなってしまうた。

T 今日、「会心のえみをもらした」じいさんの自信がくつがえされてしまう場面を読んでききます。

智美、読んでくれ。

智美 朗読

『 がんの群れは、思わぬごちそうが四、五日も続いたので、ぬま地のうちでも、そこがいちばん気に入りの場所となつたらしい。』

大造じいさんは、会心のえみをもらした。

そこで夜の間にえ場より少しはなれた所に、小さな小屋を作つて、その中にもぐりこんだ。そして、ねぐらをぬけ出してこのえ場にやってくるがんの群れを待った。

あかつきの光が、小屋の中に、すがすがしく流れこんできた。

ぬま地にやってくるがんのすがすがしい空に、黒く、点々と見えた。

先頭に来るのが、残雪にちがいない。

その群れは、ぐんぐんやってくる。

「しめたぞ！もう少しのしんぼうだ。あの群れの中に一発ぶちこんで、今年こそは、目にも見せてくれるぞ。」

りようじゅうをぐつとにぎりしめた大造じいさんは、ほおがびりびりするほどひき

しまった。

ところが、残雪は、油断なく地上を見下ろしながら、群れを率いてやってきた。そして、ふと、いつものえ場に、昨日までなかった小さな小屋をみとめた。

「様子の変わった所には近づかぬがよいぞ。」かれの本能は、そう感じたらしい。ぐつと急角度に方向を変えると、その広いぬま地の、ずっと西側のはしに着陸した。

もう少しで、たまのどくきよりに入ってくるというところで、またしても、残雪のためにしてやられたのだ。

大造じいさんは、広いぬま地の向こうをじっと見つめたまま、

「ううん。」

とうなつてしまった。

T はい。そこまでいいい。

おわりのところ、

「大造じいさんは、広いぬま地の向こうをじっと見つめたまま、『ううん。』とうなつてしまった。」

(板書)

この言葉から、じいさんのどんな気持ちを感じ取れますか。

5分ほど、時間を取る

C ノートに書込んでいる。

(書込みの途中で)

T 一年目にもよく似た言葉がありましたね。

C 「ううむ」と感たんの声

T それと比べて考えてみるといい。

C 全然ちがう。

T じゃ、少し聞いてみましょう。

志穂、ゆうてくれる？

志穂 今までいっしょうけんめいに、もうぜったい残雪がつかめるとおもってたのに、

T 聞こえた？何て言わったの？

智美 あのな、今までぜったい残雪がつかめるとおもってたのにな、つかめへんかったで、くやしい。

真人 がんは、しぶとい。

T 「ぜったいにつかめるとおもってたのに」(板書) 失敗した。

智士 なんで「ううん」言うの。「くそう！」とちがうの？

(*智士の発言を聞きもらしていた。)

T 絶対の自信があつたのに負けた。そのくやしき、ね

寛子 じいさんはな、たにしを五俵ばかりまいて、それを残雪はさかんに食べたさかい、会心のえみももらしたやん。そのとき、もうライバルに勝ったと思つたのに、負けたからくやしい。

T わかる？ もういつぺんいつて。

寛子 前はな、会心のえみをもらした時は、ライバルに勝ったというふうには思っただけ、また……

T もう勝ったと思っただけですね。その日もぐんぐんとじいさんの所へやってきたわけですからね。

確実に勝ったと思っただけなのに負けた。

和幸 もう少しで！

うんとな、だいぶん距離が離れて、西側のはしへ行ったんなら、「くそう！」ですむかもしれないけんけ どな、あれだけ自信があつてな、あれだけ近くまで来て、西側へ行かれたらな、くやしいてくやしいてTいまの和幸の言ったこと、わかった？

Cs 多数反応

真ひと えっとな、今までかんぺきだったのに、急に 西側へ行ったことで、残雪がきづいて。そこでやられた、そのことがとてもくやしい。

真人 あの、ここまで、自分の計画がうまく進むこと進んで、自信がいつぱいついてたんな、急にやられたで、がつくりきたん。

裕幸 じいさんはな、会心のえみまでもらしてな、勝ったぞと思つたやろ。ほして、残雪もそのとおりに、ぐんぐん近づいてきたやろ。ほんでな、もう少しだと思つてな、この時りようじゅうの届くところまで、もう少しで入ってくると思つた所で、西側へ行かれたんやろ。もう少しで成功やのになあつて。

力 はじめ、やつてくる時、ぐんぐんきたやん。何も考えないで。その時見おろしてて、

残雪が小屋に気づいて、ぐっと西側の方へ。ほれが、もう、ほんのちよつとの前に来たらな、鉄砲がとどいてたのに な、その寸前で、向こうに行かれたさかいな、くやしい。

T おり返す、寸前、じいさんは、どうしてた？

どう書いてる？

C ぎゅつとにぎつてた。

C ほおがびりびりするほど、ひきしまった。

T 「りようじゅうをぐつとにぎりしめた大造じいさんは、ほおがびりびりするほどひきしまった。」

この時のじいさん、どういう状態なの？

C こうふんしてる。

保 もう絶対勝てる。

真人 手がふるえてた。

T そう。もうぜつたいうてる、こうふんしてる。

その1秒あとに、ピューンとにげてしまった。

和幸が言いたかったのは、そういうことだね。そこまで近づいていたのに、にげられてしまった、というくやしき。

さっき和幸が見事にいいましたね。遠くでにげたのなら「くそう！」ですむかもしれないけど、目の前まできてにげられた、そのくやしきは、言葉にならないほどだね。

勇也 サッカーといっしょよ！

ん。前半に1点入れるやん。ほんで、後半に相手が2点入れたらくっちょいなるや

T ああ、勝っててね。

和幸 ほういうこととか、例えば、ゴール前まで、行って、キーパーもだれもいんかって、シュートしたのがはずれたときみたいなん。

T はい、そうすると、

①近づいて、もう少しのところまでにげられてしまったくやしき。これが「ううん」です。これが一つ。

それから、

②絶対の自信があった作戦がやられたくやしき。二つ出ました。まだ他に考えた

人ありますか

美希 うんとな、大造じいさんはな、残雪がわなにはまったと思っつてな、もう勝ったも同然と思っつてたん やけどな、こういうふうにしやうに西側へどんどんいってしまつたから、特別くやしき。

T ほど、これ(②)に近いね。

幸則 大造じいさんは、残雪がわなにひっかかつたと思っつてな、残雪はやっぱりおれより下やと思つてた やん。ほやけど、その下のやつにやられたさかいくやしかつた。

T ほう。今大事なこと言つた。ここで、じいさんの 残雪を見る目がまた変わる。もういっぺん言つて。

幸則 大造じいさんはな、ライバルに勝つたと思つて な、やっぱり残雪は、おれより

下やつたんやと思つ たやん。その下と思つてた残雪にやられたくやしきTわかる人、言つて。

裕幸 あんな、また、ここでは、大造じいさんは残雪はおれより下やと思つたんやろ。ほやけど、下と思つてたものにまたその方法をやぶられたやろ。ほんで、よけいくやし

いん。力 かんぺきやと思つてた作戦がやぶられてしまつたん。

T ほど、「ううん」の中身はまだあるんじゃない？

力 なんと、こんなうまいしかけが見破られてしまふんやろ。

T 残雪を見る思いは？

力 また変わった。

C さすがは、ライバル。

裕幸 もうちよつと上になつた。

T 智子がさつき何か言つてたね。

智子 じいさんは、今年こそは目にもみせてくれる ぞ、とはりきつていたのに、ぐつと急角度に方向を変えて、たまのどかないところに入ったから、どうしたら、残雪に勝てるんだらうと考へている。

T おわりのところ。「どうしたら残雪に勝てるんだらう」

力 もうライバルというより、自分より上のほうと思つてる。

T また、残雪が大きく見えてきた。

裕幸 また、残雪がじいさんより上になつてきた。

T いったい、どうやったらかいつを倒せるんだろうという驚きもあったでしょうね。そんなものかな。まだあるかな

勇也 まだあるで！

うんと、ずっとまえから、五俵ばかり集めてきたやん。な。夏のうちから一生けんめい集めてるやん。ほんでな、五俵集めたかいがあったらいいなあ、と思ってたのに、がんに負けたで、くやしいの。

C 夏の間に

和幸 わしの苦勞が！と思っつてな、夏の間の苦勞 がな、ほこでいっぺんにばあになつたシヨックで。

真人 水のあわ。

力 苦勞が実つたと思っつてたのが、最後に、「ああわしの苦勞が」

T 苦勞が水のあわになつてしまつたたくやしきもあつたでしょうね。

和幸 『五俵ばかり』が『五俵も』になつたん。

T ああ、おもしろいこと言う。どういふことか、言つて。

和幸 五俵ばかりあつたら残雪に足りるかな、と思つてたのがな、五俵もつかんだのにげられてしまつた。

T 取つてるときは、『五俵も』という気持ちはないんですね。ところが、負けた今になると、五俵も苦勞して集めたのにやられた。

浩生 五俵あつめといたのに、にげられたやろ。もつとたくさんあつめといたらよかつた。

T 後悔ね。それもあつたかもしれないね。

力 はじめから、小屋を作つとけばよかつた。

T そうそう。そういう後悔もあつたでしょうね。

はい、4つもできましたね。ノートにわかつたことを整理してください。

【学習ノートから】

和美

「ううむ」は感心しているけれども、「ううん」は、くやしがつていると思う。こつちに向かつているから、大造じいさんは、もう勝つと思つていたのに、とどく寸前に、ぐつと急角度に方向を変えたから、じいさんは、またしても、残雪のためにやられたもんだから、大造じいさんは、口に出せないくらい、くやしくて、たまらなかつたと思う。そしてから、1の場面のときに、にげられたより、2の場面ににげられた方がくやしかつたと思う。

それやし、夏のうちから心がけて、五俵あつめておいたのに、それが、いまので、ぜんぶきえてしまつたし、「目にもみせてくれるぞ」とはりきつていたのに、にげられたから、なんのために五俵も集めたんかなあと思つていた。

菜穂子

大造じいさんは、たにしを死なさずがんばってやってきたのに、じいさんの苦勞が水のあわなので、かわいそうだった。

残雪が近くまできてにげられたので、声がでないほど、くやしかった。

大造じいさんは、ぜったいに残雪に勝ったと思ったのにじいさんが負けたので、とつてもくやしかった。

美豊子

大造じいさんは、「ううん」とうなってしまった。それは、残雪にまたやられて、「これは、がんをとるのがむずかしいぞ。今度は、どんなふうにとれば、残雪に勝てるかなあ」と思っているから「ううん」とうなったと思う。

大造じいさんは、たにしを集めている間は、五俵で足りるかなと思っていたけど、残雪にまたやられたときには、

「五俵も集めたのに、一わもとれなかった」と思って、とてもくやしくて、くやしくてならないから、来年の冬は、

「かならずがんをつかまえてやる」と思っていた。

それに、大造じいさんは、残雪をたかが鳥だと思っていたけど、大造じいさんは、「これは、なかなか手ごわい相手だな」

とあって、いっしょうけんめいに考えても残雪のにくらしさが頭からはなれなくて、とても考える気にならなかつたと思う。けれども、いっしょうけんめい考えても、残雪のくやしさをけしながら考えたと思う。

和幸

大造じいさんは、ぜったいの自信があつて、かんぺきだ、今までの苦勞がみのつたのだとおもっていたけど、にげられて、五俵ばかりが、五俵もになる感じがして、せつかくの苦勞が水のあわになって、大造じいさんは、くやしくて、悲しくて、夏の暑い時も、朝から、ばんまで、いっしょうけんめい残雪をしとめるのだとおもっていたのに、くやしいうような、感心したような、感じがして、夜もねむれないくらい、くやしいう気持ちがつよかつたんだらうけど、少しは、つぎの秋はどうして残雪をうちとつてやるうかと考えていたと思う。

真人

去年の「ううむ」の時に、残雪は、かしこいと思っていたけど、また、「ううん」でもものすごくかしこいと思いなおした。

幸則

大造じいさんは、かとう君の言ったとおり、残雪に負けたとたん、せつかく五俵もまいたのと思つた。こんどこそとおもっていたのに、まけたからくやしかつたと思う。べんきようしているうちに、だんだんすぐうかぶようになつた。

晃典

残雪があとちよつとどこに来てたら、今までのたにしを毎日あつめていたり、育てたりしていた苦勞がやつとかなうと思っていたのに、急に西の方に行つて、苦勞が水のあわになったから、また、残雪にやられて、くやしい。

真人

せつかくあつめて五俵もしんせんたにしがぱーになった。歩き歩きた苦勞がばーになった。
ぜつたいとつてやるぞといつていた努力がぜんぶ水のあわになってしまった。

智士

- ① ぜつたいこのしかけは、せいこうすると思つたのにしつぱいしたで。
- ② この小屋をたてなかつたらよかつたと思つた。
- ③ 五俵ばかりとつたのに、せつかくの苦勞が水のあわになった。くそうとおもつた。

智子

じいさんは、ほおがびりびりするほどひきしまつてこうふんしていたのに、「もうあとちよつと」というぎりぎりの所で西側に方向を変えたからくやしい。もうちよつと前の方で曲がつたら「くそー。」ですむかもしれないけど「もうちよつと」という所で曲がられたから、「ううん」と言葉が出ないけど、「ううん」と言つた。

夏のうちから一生けんめいたにしを集めたのに、もう少しの所で、曲がられたから、

五俵集めたのが、その時じいさんにとって3俵ぐらいに思えた。あんだだけ苦勞してやつたことが何もかも水に流れたみたいになつてしまった。苦勞したことが全部残雪がとつていつてしまったみたい。残雪は、何でも見ぬいてしまうなあと思つている。

大輔

近づいて近づいて近づくと、前の苦勞を思出して、急に西へ行つてしまったから、西へ行くほど、気が重くなつていく。

【10月30日（金）】

『大造じいさんとがん』⑥

今年は、ひとつ、これを使ってみるかな。」

*この時のじいさんの気持ちを追求する。

【授業記録】

T 「今年は、ひとつ、これを使ってみるかな。」

(板書)

『これ』てわかるね。

C がん

T どういうがん？

C 二年前につりばりの計略でつかまえたがん。

C いけどったがん。

C 自分のしかけでとったがん。

T ここで、書込みしていて、問題になっていたのは、今年のじいさんは、なんだか、のんきだなあ。

今までだったら、

一年目はどうだったかというど？

智士 もう真剣でなあ！

力 ずっと前から考えていた

T 「かねて考えておいた」(板書) 特別な方法って書いてましたね。

それが見破られた次の年、二年目は、

「じいさんは、夏のうちから、」(板書)

ところが、三年目は、「ぼつぼつ、例のぬま地にがんの来る季節になった。」

その今になっても、「今年は、ひとつこれを使ってみるかな。」

智士 やられたで、もう……元気がないんちゃう？

T さあ……『今年は、これを使うぞ』じゃなくて 『今年は、これを使ってみるかな。』

11 ページから12 ページあたりを読みながら、ここの言葉から、じいさんのどんな気持ちを感じられるか、ノートに書いてください。

10分ほど、個人学習

T はい、とりあえず、聞いてみましょう。

浩生 ちよつとためしてみた。

T うん、これは、いいかえれば、ちよつとためしてみるか、ということやな。『ひとつ』はちよつと『使ってみるかな』は、はっきり決断してないんだね。そこが問題。なぜ、決断しないのか。

美希 このがんは、二年前にいけどったがんだから、慣れているのは、いいけど、もし、失敗するとあかんさかいな、どうしようと思ってる。

T 慣れているから、良いような気がするけど、もし 失敗したらどうしよう、という気持ちがある。

真人 不安があるの。ちよつと。

T はいよく似た意見の人出して。

勇也 わからんけど。うんと、これ、「今年もぼつぼつ例のぬま地にがんの来る季節になった」て書いたるで。始めやん、がんの来る。じいさんは、この方法、一回も使ってへんやん。ほんで、どうしたら、うまくいくかな、とおもってるやん。これ、もし失敗したら、もう見破られるで困るし。なんか、うまくいきそうでないし。ほんで、最初は、Tうん。まだ、一回も使ったことがないから、失敗したらどうしよう。

力 ほれもあると思うけど、
T力ちよつと待って。もう少し女の人の意見を聞こう
智美 美希ちゃんといっしょでな、がんは慣れてるけどな、もし、失敗したらかなんで。

Tとなりの弘子は？

弘子 じいさんが考えていたのは、残雪にやられっぱなしで、自信が無くなっている。勇也 うん、なるほど。

真人 がんにやられっぱなしやで、大造じいさんは、がんを捕る根気が前よりなくなってる。

あんな、じいさんは、自分の方が上と思ってたのにやられたで。

真ひと Tページの1行目と2行目に、「がんを手に入れた時から、考えていた」と書いたるやん。ほん で、来年つかってもいいし、さ来年使ってもいいし、いつ使ってもよいでな、ほんで、迷ってたん。ほんで、のんきそうに言うたん。

真人 もうおじいさんには、これしかなかったんちが う。
Tはい。

弘子がいったのは、きっぱり言わないのは、一年目も、二年目もやられた。そういうので、どうも、自信がなくなってきた。というのですが。

そうじゃない、という人。

C 力、幸則ら数名

和幸 自信ない。もし、自信があったら、「ひとつこれを使ってみるかな」とちこて、「ぜったいこれを使うぞ」と言う。

T はい、今、やられっぱなしで、弱気になってるんだというグループの人がいます。では、そうじゃない、という人。

幸則 じいさんは、自信はあるんやけど、何回も残雪にやられてるでな、いつもよりしんちようにな、考えて残雪のことを。

力 ほんで、ひとつこれを使ってみるかな、と言ってる。

ほやし、二年前、残雪が来たとき、一生懸命つかんだがんやん。ほの一匹を使おうかな、使わんとこかな、て、二年前から、だいぶん迷ってたと思う。自分が自信があるさかい、これを使ってみようと思ったん。

T ああ、お前が言いたいの、じいさんは、自信のない方法なら絶対使わない、というのね。

しかも、二年間ずっと考えてきた。

裕幸 一年目は、今年こそは、と考えておいた方法が一回でみやぶられたやろ。

二年目は、夏の内から心掛けた方法も残雪に見破られておわたやろ。

三年目は、じっくりと、見破り方はないか、他の方法はないか、と考えた上で、ほ

んで、このがんを使うことに力を入れてきた。

T ということは、弱気になっていっているというよりも、より、しんちようになっている。

今までのじいさんは、どっちかというとかんたんに喜んでたね。『会心のえみ』とか。そういうじいさんから、もつと残雪のすごさがわかってますから、よりしんちように、これでもうほんとうにどうもないかなあ、て考えてる。

力 点検している。

勇也 ぼくかわった。

T みんなそれでいい？

じゃ、その上で聞くけど、

しんけんには、じっくり考えた結果が、「使ってみるかな」でしょ。

何が不安なんですか。読んでごらん。

二年がかりであたためてきた方法でしょ。それを今の段階になっても「使ってみるかな」

はつきりこれにしようと思われぬ原因は何なのでしよう。

智子 おじいさんは、じっくり考えているけど、いつ、また、どんな手を使って見破ってくるかもわからないと思つて、不安な感じだ。

T うん、残雪の知恵をさぐつてるんですね。

残雪がすごいやつだから、どんな方法で見破ってくるかもわからない。という不安。それは、いいですね。

じゃ、このがんに対する不安は、あつたでしょう か。

力 あつた！

保 なかつた！

真ひと ちよつとだけあつた。

T どれだろう。

C の反応

全くなかつた。 8人

少しあつた。 10人

かなりあつた。 2人

T 読んで考えてごらん。

(T ゆっくり朗読してやる。)

勇也 やっぱ、全然ないわ。

和幸 まったくなかつた。

暢子 今では、すっかりじいさんになついていた、て書いたるやろ。ほやさかい、もう、全然ない。

勇也 うんとな、口笛をヒューヒューて言うたら帰ってくるやん。じいさんになついているやん。ほんで、がんをとるんでも、もぐらしといてな、ヒューヒューていうたら、きよるやん。ほんで、がんもそれにつられたら、くる。

保 「じいさんにとびついてきた」て書いたるやん。ほんで、たいして慣れてんかつたら、まだ、こわごわで逃げよるやん。(C あーんなるほど)

もう、完全にじいさんに慣れてるでな、とびついてくる。

T 今、大事な言葉、見つけたね。とびついてくるほどに慣れてる、ということは、がんの群れにときはなしても、そのがんは、がんの仲間よりも、じいさんに来るわけですよ。

勇也 ほらほうよ。二年前からずっと飼ってるやん。ほんで、もう、二年も飼ってるで、おじいさんにすっかり慣れてる。

和幸 「その肩先にとまるほど」

うんと、まだ、全然飼いやつたら肩先にとまるよりか、逃げよるやん。ほやけど、二年も飼いやつたら肩にとまって、口笛 ふいたら、もどつてきよるし、

T まだあるでしょ。

C どこにいても。

T そこ。わかる人ない？

勇也 うんとな、がんに見つからへん場所だったらな、どこでも、このがんは、ヒューヒューいうたら、来るやん。ほんで、見つからへんし、よい方法。

真人 見つかるにあかんで、口笛が一番いい方法なん和幸 残雪のことも考えてるん。

去年よ、たまのとどきよりまで来て逃げられたやん。ほんで、

力 不安あつたとおもう。

一応、残雪の群れに従ってた鳥やで、

T そこが問題でしょ。力がいつてるように、もともとは、残雪の群れにいたがんですよね。だから、そこに放したら、もとの群れに帰るといふ不安はあつたかなかつたか。

C s ない！

大輔 口笛ふいたらじいさんのとこへ帰ってきよるさかいな、

T 今では残雪との結びつきよりも、じいさんとの結びつきの方が（C 濃い！）濃いわけですよ。

「うまくいくぞ」の追求

T じいさんが、「これを使ってみるかな。」という言いかたをしたのは、これまで、やられつづけてきた、残雪の知恵をおそれているからですな。

ところが、12ページを見て下さい。

「うまくいくぞ」といっていますね。

この時は、まだ不安があるの？

C ない。

C 自信がある。

T ぬま地を偵察したら、残雪への不安がなくなった。なぜ、不安がなくなったのでしょうか。

12ページを読んで考えてごらん。

C それぞれ考えている

T ゆっくり朗読してやる。

C 考えているが、わけがわからないという顔をしている子が多い。
(このままでは無理なようなので、少し手掛りを出すことにした。)

T 残雪たちは、どんな所にいたの？
どう書いている？

C 「じいさんが小屋がけした所から、たまのとどきよりの三倍もはなれている地点をえ場にしてる」(板書)

「そこは、夏の出水で大きな水たまりができて、がんのえが十分にあるらしかった。」
(板書)

じいさんは、ぬま地を偵察に行つて、こういうことを調べたわけですね。

こういうことがわかったら、すっかり残雪への不安がなくなった。

ここにヒントがあるわけや。

なぜ、じいさんは、小屋がけした所からたまの届く距離の三倍の所にいると「うまくいくぞ」と思うのか。

なぜ、がんのえが十分にあると、「うまくいくぞ」になるのか、て考える。

さあ、考えて。

力 もう考えた。

C わからん。

もう少し時間を取る。

T じゃ、聞いていこうか。まず、寛子が考えたことからだして。

寛子 「そこは、夏の出水で大きな水たまりができて、がんのえが十分にあるらしかった。」て書いたるでな、そこは、がんの食べ物がたくさんあるさかいに、がんがそこにやってくると思つて、じいさんは、自信を持った。

T よくにている人。

真人 がんのえさがあつたで、はなれない。

T ここからはなれない。必ず、ここにやってくる。

力 がんのえが十分にあるということは、がんは、もうそこに来るやん。えがいっぱいあるで。そこへ食べに来たということは、たいがい、えもあつて、見通しもきく所やと思ふ。ほやさかいな、そこへいつも来る。

T 去年は、じいさんがたにしを集めて、そういう場所を作ったわけですね。

今年も、自然にそういう場所ができていたんですね。

しかも、残雪が来るということは、見通しがよくきく場所。

それが、ひとつ。

もうひとつ、「たまのとどきよりの三倍もはなれている」これが大事だ、ていう人。

大輔 うんとな、たまのとどきよりの三倍やったらな、いくら残雪でも、こんなにはなれてるんやさかいな、いつも鉄砲で撃つてるやん。ほんで、たまのとどき距離の三倍はなれてたら、安心やと思ふで、見つからへん。

T 今、大輔が大事なこと言つたね。

和幸 三倍もはなれてるんやでな、大造じいさんがかっているがんをはなしてもわからへん。安心してるさかいに。(残雪が)

T 警戒しない。うん、なるほど。
力 さんがスパイということわからへん。

裕幸 そこは、たまのとどく距離から、三倍も離れているしな、見通しのきく所やろ。
ほやし、残雪とかは、そこにえさが十分にあるんやろ。で、ほこが一番気に入りの場所やでな。

T 今ゆうてやることわかったかな。智美わかった？

智美 ……:

T たまのとどく距離の三倍、というのは、非常にだいたいな意味がある。

和幸 残雪にもよいけど、じいさんには、もつとよい

T もし、これが、たまのとどくきよりだったらどうでしょう。

じいさんは、「うまくいくぞ」と思ったでしょうか。

Cs 思わん

T なぜ？

佐夜子 さんが気づきやすい。

T 気づきやすい。

C あやしいと思う

T 近すぎたら、あやしいと思うかもしれないね。

C じいさんが見える

T じいさんの姿が見えてしまうかもしれないね。

じゃ、逆に、もつと五倍もはなれていたらどうでしょう。

Cs あかん。

佐夜子 さんのようすがわからん。

智士 様子なんかわからんでもよい。

幸則 口笛さえふけば、さんはもどってくるだろうと思ってるさかいな、顔が見られるのは、関係ないけどな、その口笛が届かんとあかんで。

浩生 口笛の届く所で

T そう、おとりのさんが口笛がとどかなければ、合図がおくれないわけですから、はなれすぎても困るわけね。

とところが、三倍の距離というと、口笛はとどく。じいさんの姿は（C 見えない！）裕幸 さんのえは十分にある。

T 亜紀子がもうひとつおもしろいこと見つけてるんです。言つて。

亜紀子 小屋を作らなくても作つてある。もし、今作つたら、また様子が変わったさかに、残雪が気づいて、場所をかえたり、逃げられてしまうから。

和幸 小屋があるので、残雪も移動したんやさかい、ほんさかい、警戒してない。

T 大事なことやね。去年の小屋をちゃんと知ってるわけね。だから、わざわざ小屋から三倍も離れた距離をとつたわけですよ。

力 その小屋が残雪をそこまで行かした。

T そういうことですね。ということは、逆にこの小屋を残雪は、警戒していますか
C してない。

T 去年は、小屋を作つたばかりに失敗した。今年は、なにも新しいものは、作つて

いない。

全くがんは警戒しない状態。

ほと、もうわかったかな？なぜじいさんが自信をもったか、そのわけがいくつあったね。ノートに整理して。

【11月10日（火）】
『大造じいさんとがん』⑦

【教材文】

じいさんは、ピュピュと口ぶえをふいた。

こんな命がけの場合でも、かい主のよび声を聞き分けたとみえて、がんは、こっちに方向を変えた。

はやぶさは、その道をさえぎって、パーンと一つけた。

ぱっと、白い羽毛が、あかつきの空に光って散った。がんの体は、ななめにかたむいた。

もうひとけりと、はやぶさがこうげきのしせいをとった時、さっと、大きなかげが空を横切った。

残雪だ。

大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当てて、残雪をねらった。が、なんと思っ

たか、再びじゅうをおろしてしまった。

残雪の目には、人間もはやぶさもなかった。ただ、すぐわねばならぬかまのすがたがあるだけだった。

大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当てて、残雪をねらった。が、なんと思っただか、再びじゅうをおろしてしまった。

T じいさんにしてみれば、残雪というのは、ここ何年も、ずっとやられてきて、初めて残雪がねらえると ころにきたわけでしょ。そして、ねらった。ところがじいさんは、じゅうをおろしてしまった。うとうと思えばうてたのに。なぜなんだろう。書込みを見ると、みんなの考えはいろいろあるようです。

これから、5分間あげますから、もう一度よく読んで自分の考えを書いてください。

C 考える

T まず、貞幸から。

貞幸 じいさんは、自分のがんを助けられると思ってじゅうをおろした。

T 似ている人

勇也 ぼくも。

じいさんは、自分のがんを助けられるとおもって。

佐夜子 ほかのがんを捕るより、前いけどったがんの方を助けてやりたい。

T じいさんにとつて、このがんは、家族みたいなもんだから。(Cペット)だから、じいさんとしても助けない。

力 助けたい、という気持ちは、「ピュピュピュ」にある。

真人 じいさんは、そのがんを見捨てられないの。

力 残雪が来て初めてつかんだがんだから。

T 見捨てたくない。はい、そういう意見のグループがありますね。

智士 あんな！自分のがんがきずついたらかわいそうやでな、助けてもらおうと思つてな、鉄砲うつのやめたん。

力 さとつちに似てる。

もう、おじいさんには、鳥が空でやってることやでな、もうじいさんには、空とべへんでな、自分では何にもできひんで、残雪に任せようと思つたん。

幸則 ぼくは、ほれは、おかしいとは思わんけどな

T ちよつと待つて。またおかしければ、後で考えよう。

まず、①としてこういう考えがありますね。

またべつの意見だつていう人。

和美 残雪が来て、ほこを射とうと思つたけどな、

………なぐりつけてな、ほんなあぶないこととしてがんを助けたさかいな、じいさんはもう………

T じゃ、和美、意見がまとまつたらもういっぺん言つて。幸則

幸則 ぼくは、大造じいさんはな、残雪が自分の友達 を助けようとしているやん。ほんでな、そういう気持ちに心をうたれてな、うてへんようになった。

力 ある！幸則君のも

真ひと 僕も似てる

明子 残雪がなかまを助けようとしてな、助けようとしてるのをじやましたら、そのやさしさにきずをつけるみたいだから。

力 先生、これはなあ

T わあわあ言わない。あいつが言つたことをよく聞こう。

やさしさに傷をつける？

智子 自分の仲間を一羽もみのがさないで、必死で助けに言つた残雪を見て、あんなやさしい残雪をうつのは、ひきょうだと思つた。

真人 人間のはじ。

力 はじではないと思うよ。

美希 仲間を助けるやさしさもあるけど、感心している。なんか、勇気がある。

T ほうすると、心を打たれた、というグループがあるね。

真ひと さっきと同じやけどな、じいさんはな、残雪のなかまを命がけで助けようとする勇氣に心を打たれてな、やっぱりひきょうな手は使わないで、正々堂々と戦おうと思つた。

真人 いま残雪を撃つとな、残雪は死んでもいいと思つて友達を助けに行つてるやでな、今鉄砲で射つと、残雪も死ぬし、じいさんのおとりのがんも死ぬで。かわいそ

うなん。

T ほど、①に近いのね。

力 自分の仲間を助けるのに見とれたということもあるけんどな、あの、残雪はこのとき、じいさんが いることはわかっていると 思う。残雪は、もう仲間を 助けるのに命がけやと思う。ほこを射つというのは、ひきょうというか、一生心にくいが残る。

大輔 今、残雪とおとりのがんは、今同じ条件やでな、同じようにねらわれてるんやさかいな、ほんなど、ここで、うとうと思っても撃つ気がないの。

T ちよつとちがうね。大輔らが言ってるのは、ひき ようだとかそんなことを考える以前にもううつ気が ない、撃てなかったんだという。

撃たなかったというのと、撃てなかったというのとちよつとちがうでしょ。

さあ、今3つの意見が出ただけけど、もう一度自分はどれに近いか、考えて。

ここで1時間目が終わる

【みんなの考え】 学習ノートから

・ 仲間を助ける勇気があるのに、大造じいさんはうち たくてもうてない。(浩生)

・ 残雪の目には、人間もはやぶさもなかった、ただ救わねばならぬなまの姿があるだけだったと、仲間を助ける残雪の姿を見て心をうたれてうちたくてもうてなくなつた。(寛子 真ひと)

・ いっしゅんでもうとうとして、何かもうしわけないような気がしたと思う。(弘子)

・ こんな所でうつとひきように思えた。せいせい堂々と とりたかった。(裕幸 哲郎 力 美豊子 智士・いままで正々堂々とたかかってきたのに、今うったらひきょうな戦いになるからうたなかつた。(保)

・ いのちがけで助けに行くところをうつとひきようだ と思った(和美 菜穂子 暢子 明子)

・ 今まで以上に残雪がすごく見えたから。(亜紀子)

・ 今までは、にくたらしいとか思っていたけど、仲間を助けるやさしさがあることをこの時初めて知った。残雪を見直した。(智子)

・ 残雪とおとりのがんは、今命がけでたかかっていて同じじょうけん。(大輔)

・ おとりのがんを助けなあかんと思ったから。(晃典・じいさんのがんだからうつ気がない。(志穂)

◎なぜ、うつのをやめたのか。

①おとりのがんを助けたいから。

②ひきようだと思ったから

③うてなかった。

T じいさんがじゆうをおろしてしまった。それは、なぜだろうか、という問題で、こういう意見がありました。

①おとりのがんを助けてほしいから。
それから、

②ひきようなやり方でうちたくない。

(C堂々と戦いたい)

助けにいくのを横からうつのは、ひきようなやり方だから、やめた。

これは、じいさんの意志でやめたんですね。

そうじゃなくて、残雪の姿を見ていたら、うてなくなってしまうんだ、うつ気がなくなってしまうんだ、という意見がありました。

C みんなは、この中のどれなんか。

③!

T ①の人………1

②の人………12
③の人………13

①の意見の人がほとんどなくなってしまうんだけど、

①のような気持ちはあったんでしょうか。

智士 あった!

幸則 なかった! わけもある。

T そういう気持ちはなかったという人。

C 7〜8人挙手

T なかったという人は、証拠を出して。

幸則 おとりのがんを助けたいというんやったらよ、残雪に助けてもらおうなんて思

わんと、自分でうったらい。

智士 うったらはやぶさ、逃げていきよるやん。

C (口々に言いあいになる。)

和幸 残雪に任しとくんやったらな、もし、はやぶさに残雪がやられたらな、二羽ともやられるやん。

力 あんな、残雪に助けてもらおうと思ってるやったら、ねらわんかったらいい。

智士 ほんなん、最初はよ!

力 ほやし、はやぶさは、音だけでも、びっくりしてにげよる。ただ、顔見ただけでも逃げたんやで。

裕幸 上向けて、バーンと鳴らしたらいい。

智士 先生！最初はじいさんは、残雪をつかみたい気持ちやったんやろ。ほのつかみたい気持ちがあつたでねらったんちがう。ほて、後から助けてほしいと思つたんちがう。力 後からとは、思わんけどなあ。

裕幸 ほんなことはもう思わんかった。

T ①の意見は消してもいいかな。

もし、じいさんがどうしてもがんを助けたいんなら、もっとべつの方法がある。はやぶさをうちおとせば

いいわけですね。残雪に頼まなくてもじいさんが直接助ければいいわけですね。

智士 なんでえな。あの、がんとはやぶさは対決してるんやろ。どっちにあたるかわからんやん。

C ほんなら、音だけで、おどかせばいいやん。

T じいさんだって、おとりのがんを助けたいという気持ちはあつたでしょうね。『ピュピュピュと口ぶえ』を吹いたんだから。でも、じゅうをおろした時には、それとは関係ないんじゃないか。

じゃあ、②と③があつて、よく似ているんだけど、ちがいはわかる？

C わからん。

T 「じいさんは、じゅうをおろしてしまつた」て書いてるけど、②のような意見だったら、「うってはいけない」と自分の意志でおろすんですね。

③は、もう、うてなくなつて、自然におりてしまう。そういう感じですね。

真ひと、ちがいがわかる？

真ひと ②は、自分の意志で

③は、どういうわけか、自然におりてしまう。

T ②は、前の時間たくさん出ていたから、③の意見を出してください。

裕幸 なんか、残雪は、おとりのがんを必死で助けてるやろ。ほんでな、その必死さがじいさんにもわかつて、残雪に心をとられたみたい。

力 あ、だいたい同じ。

残雪がな、自分の仲間を助けている心に見とれてな、残雪をうてへんようになったん。残雪が助けてると

ころを見てると手が勝手におりてしまう。

T 他の人どう？

大輔 必死で助けてるのに心打たれてな、……おろしたん。

T この必死さに心を打たれた

美希 「残雪の目には人間もはやぶさもなかった。ただ救わねばならぬ仲間の姿があるだけだった」て書いてるやん。ほやさかいな、はやぶさはがんにとっては、敵やん。ほやさかいな、自分、助けねばならない、て書いてるけど、自分も行ったら、もし弱かったら二羽とも負けてしまうやん。ほやけど、残雪は必死で助けてるし、なんか、感動してる感じ。

T 心うたれた、も感動したのも同じことなんだけど、……

もうちょっと聞くけどね、残雪は頭領でしょ。頭領だから、自分の仲間のがんを助け

にいくのは、当り前でしょ。考えてみれば。なぜ、その当り前のことにじいさんは、そんなに心うたれるんですか。感動してしまっんですか。

勇也 必しになつてるでよ。
Tもう少しそこはつきりさせよう。なぜ、仲間を助けに行くことがそんなにもじいさんの心をうったのか。読んでください。みんな簡単に感動だとか言うけれど。

Tだれか言つて。和幸

和幸 残雪の目には人間もはやぶさもなかった。ただ救わねばならぬなかまのすがたがあるだけだった。て書いたるさかいに、……………

ねろてるのに、けいかいもせんと、ただなかまを助けるといふ気持ちだけで、いつも冷静な残雪がりようじゅうのとどくところまできた。

T 今、終わりの方でだいじなこと言つたね。いつも冷静な？

和幸 いつも冷静やけどな残雪は。まわりとかけいかいして。けど、なかまがやられる時は必死で助けてるさかいな、

勇也 なるほどなあ！

T わかる？非常に大事なこと。

裕幸 ほれとな、文章でいうと、「残雪の目には人間もはやぶさもなかった。ただすくわねばならぬなかまのすがたがあるだけだった。」て書いたるでな、ほれにじいさんは、心をうたれたん。

力 残雪は、加藤君がいうたみたいにな、いつもやったら、人もなにも寄せつけへんやん。それを寄せつけたということは、よっぽど残雪は助けようという気持ちがあるいう

ことがおじいさんにわかった。

真人 寄せつけた、いうか、自分から行つたん、人間の所へ。

T そう、今までは、いつも冷静で、決して人間が近付くところまで、来なかったんですね。それがいま、自分から、来た。

真人 身を捨てて。

りようじゅうが十分とどくところまで来てるのにな、残雪はほれを知つてて行つてるの。

T ここに来るといふことは、もうじいさんのりようじゅうが十分すぎるほど届く距離なんでしょう。あの冷 静な残雪がそれを知つて、それでも来るんですね。

幸則 あのな、「最期のときを感じて」て書いたるやん。ほこでな、残雪はな、死ぬのを覚悟してたんやん。自分は死んでも仲間を助けたい。

T 幸則が言つたのは、残雪の必死さの中には、死を覚悟している。そうですか。Cしてる

裕幸 そうでなかつたら、もつと外回りから行く。

死を覚悟してんかつたら、りようじゅうの届かん所を回つていくと思う。

T 「いきなり、てきにぶつかつていった」て書いてるね。ということは、じいさんの鉄砲が（智士見えたつても！）そう。「人間も」て誰？（Cじいさん）じいさんも目に入つても、そんな関係なかった。ただこのがんのことだけが頭にあった。

もう一つ聞くけど、はやぶさつてどういう鳥？

浩生 鷹みたいもん。

T そう、鷹の仲間だね。ということは、
C ものすごい強い
真人 残雪とはやぶさとどつちが強いのか？
T 残雪とはやぶさは力、同じぐらいなんですか？
C ちがう。はやぶさの方が強い。
T そもそもはやぶさは、何しに来たの？
C がんをつかみにきた。
真人 えさにするの。
力 ということは、がんより強い
真人 がんが弱いからねらいよるの。
T ほうすると、一つは、じいさんがいることを承知で、飛びこんでいく。この時点で、80%以上死を覚悟している。しかもむかっていく相手のはやぶさは
智士 じいさんみたいな敵
裕幸 はやぶさのとこまで行けるかどうかかわかんぐらい。
T 二つの敵がいる所へあの冷静な残雪が飛びこんでいったのを見た時にじいさんは、智士感動した。
T うん、その感動の中身はどういったらいいかな。 …… 亜紀子がここで、残雪を見る目が変わった。て書いてたね。言って。
亜紀子 残雪が、仲間のために死んでもいいような、それだけ仲間を大切にしている。今まで以上に残雪がすごく見えた。

智子 残雪に対して、今までにくたらしい、とか思っていたけど、仲間を思うやさしさがあることが初め。てわかって、残雪を見直さねばならないと思った。
T 言葉で説明するとそうなんだけど、もっと生々しいもの。ここでじいさんがジーンときたもの。和幸、もういっぺん言って。
和幸 あのかんぺきともいえる残雪がな、けいかいも何もせんと、まっすぐにはやぶさに向かってるから、
T そういう残雪の姿に今までと違う残雪を感じたということですね。智子らが言ってるのは。

裕幸 この残雪は、じいさんの二度の方法をやぶったやろ。いつも冷静でかんぺきやろ。その残雪がな、りようじゅうのとどく所まで入ってきたで。

幸則 ぼくは、いつも残雪は安全な方へいうか、あぶない方へは行かんやん。そんな残雪がな、自分から危ない方へつつこんでいったでな、ほんで感動した。

T 今の、もういっぺん言って。

幸則 いつも残雪はあぶない方へは行かんやん。安全な方へ行ってるやん。その残雪がな、初めて危ないほうへ、なかまを助けるために突っ込んでいった。

T わかる？ 今までの残雪は、いつも安全な方へ逃げるとい方法で身を守ってきたんですね。ところが、今初めて

勇也 じいさんは、びっくりして、しんけんでたまら んかった。

T そう。びっくり、というのがここのじいさんの気 持ちかもしれないね。

暢子

私は、始めは②だったけれど、③に変わった。なぜ、うてなくなったのかは、まとめて見ると、

大造じいさんは、残雪を見て、必死になって死もかくごしているのを見て心をうたれた。はやぶさは、がんよりもすぐ強いのに、ただ、仲間のために、死んでもいいはないと思いつながら立向かっている残雪を見て、いつも冷静で、安全な所しかいない残雪なのに、今はしゃやていきよりもはいつているのに、そんなこと気にしないで、仲間を救おうとしている残雪を見て、じいさんは、すごく感動して、自然に手が下にいつてうてなくなつたと思いました。

明子

残雪は死をかくごしている。頭領として、相手が強てきのはやぶさとも思わないで、仲間を助けなければならぬと思つていた。それも、いつもは安全な場所にいるけど、この時は、いつもの残雪とちがつて必死になつていた。こんなに助けようとする残雪に大造じいさんは心を打たれて感動した。

残雪がこんな強い心を持つていたから、じいさんは、自分があまかつたと思つたと思う。

感動して、意志でじゆうをおろさないで、何もないのに、手だけが勝手におりてい

つたと思う。

幸則

ぼくは、今まで安全な方へ行つていた残雪が初めて危険な方へ行つたから、そんな残雪に心を打たれた。残雪が大きく見えた。

智子

◎加藤君の意見でわかつたこと。

いつも、冷静で人間のはたへは、よらなかつた残雪が、自分の仲間を助けようと、自分とごかくじやないはやぶさ（敵）にぶつかつていつたのを見て、びっくりした。横にめをやらないで、がんをめぐけて一直線にいつているのを見て、うてなくなつた。

◎亜紀子ちゃんの意見でわかつたこと。

亜紀子ちゃんは、今まで以上に残雪をすごいと思つたといつた。私もよく考えてみると、何度もやられていたのもすごいと思つているけど、それより、今まで残雪を下に見たり上に見たりしていたけど、もうこの時に、残雪はやつぱりおれより上だつたと思つたと思う。

勇也

しんけんで、びっくりした。じいさんは、がんに負けたなかなあと思つた。

貞幸 残雪は、じぶんがしんでもじぶんのなかまをたすけなあかん。じぶんのやくめをはたさなあかん。(そういう残雪の心にうたれたのだからね。)

寛子

残雪は、いつもなら、冷静で強いものにはぜったいに向かっていかなかったのが、おとりのがんを助けようとして必死になって、死ぬかくごをして、はやぶさにおもいつきりぶつかっていったのをじいさんは見て、「あの冷静な残雪が」と思いびっくりもしたし、ものすごく心を打たれ、感動をってしまったとわかりました。だから、うてなくなり、再びじゆうをおろしてしまった。

亜紀子

きけんな所へは一步もはいらなかったあの残雪が、仲間がはやぶさにやられそうになつていると、はやぶさもりようじゆうを持った人間までいる所に、すごいスピードでとびこんできた。残雪が今まで以上(人間以上)にちえや勇氣を持っている鳥に見えた。

美希

落着いて行動している残雪が必死でやっているの、びっくりしている。はやぶさは、がんよりも強いし、たかの仲間だから、きつと負けるに決まっていると思うけれど、

命がけでやっているから、心を打たれた。

菜穂子

残雪は、いつもだったら、冷静にしているけど、大造じいさんのおとりのがんを死ぬ気で(必死)がんを守っている。残雪の目には、てつぼうをもったかりゆうどがいても。がんをねらうはやぶさがいてもきにしないで、がんをたすけたいから、ものすごく必死で、大造じいさんは、自然にうてなくなった。

大輔

いつも冷静な残雪があんな、必死で死ぬ気であるしんけんな表情をみて、心が強く、重くなる気持ちで、うつことすらできない。

和幸

はじめは、ぼくの意見は②だったけど、みんなの意見を聞いて③にかわった。ぼくもよい意見が言えたので、今日の勉強はよかった。

和美

残雪は、りようじゆうのとどくことを知っていて、自分よりつよいはやぶさにむかっていったのを見て、大造じいさんは、びっくりもしたし、かんしんもしている。

晃典

自分より力の強いやつに仲間のために死ぬ気ではやぶさに向かっていったのが、心をうたれた。

藤森 真人

じいさんは、あの冷静な残雪が、なかまをたすけるために、きけんな所に飛びこんだそのとてもりっぱな残雪の心に、心をうたれたと思う。

丸野 保

残雪は死ぬ気ではやぶさにぶつかっていったので、びっくりした。いつも冷静な残雪が行ったのでびっくりした。

青山 哲郎

あの冷静さを持っていた残雪が、いきなりきけんな所にとびこんでいたり、たった一わの仲間をそれほどにもしてまもるということは、自分は死んでも仲間はころされないようにするということで、心をうたれたと思う。

松宮 弘子

大造じいさんは、いつも冷静な残雪が人間もはやぶさもなくて、ただ救わねばならないという目をしていて、必死で死をかくごしているみたいで、じいさんは、強く心を打たれて、うてなくなったとわかった。

【11月11日（水）】

『大造じいさんとがん』⑧

【教材文】

そのまま、はやぶさと残雪は、もつれ合って、ぬま地に落ちていった。大造じいさんはかけつけた。

二羽の鳥は、なおも、地上ではげしく戦っていた。が、はやぶさは、人間のすがたをみとめると、急に戦いをやめて、よるめきながら飛び去っていった。

残雪は、むねのあたりをくれないにそめて、ぐったりとしていた。しかし、第二のおそろしい敵が近づいたのを感じると、残りの力をふりしぼって、ぐっと長い首を持ち上げた。そして、じいさんを正面からにらみつけた。

それは、鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる態度のようであった。大造じいさんはが手をのぼしても、残雪は、もうじたばたさわがなかった。それは、最期の時を感じて、せめて頭領としてのいげんをき
ずつけまいと、努力しているようでもあった。

大造じいさんは、強く心を打たれて、ただの鳥に対しているような気がしなかった。

【授業記録】

・めいめいで読む

哲郎 朗読

「はやぶさもさるものだ。さつと……………」
大造じいさんはかけつけた。」

T はい。

美豊子、じいさんは、どこへかけつけたの？

美豊子 残雪とはやぶさのいる所。

T うん。もつれ合って、

真人 戦っている所。

T そこへかけつけた。

勇也 はやぶさがおちたん？がん？

T どうなん？「そのまま、はやぶさと残雪は、もつれ合って、ぬま地に落ちていった。」
て書いてるね。ということは？

C 両方や。

力 ほんなら、どろどろによごれてるんや。

T そこへかけつけた。かけつけたということは、

(真人 急ぎ) 急いでるんやね。

その時じいさん、何考えてますか？その時じいさんの頭の中は？

C 考えてる

T 美豊子、おまえの考え、言うてみ。

美豊子……………

T 何も考えてなかった？

美豊子 大造じいさんは、自分のライバルをなくすみ

残雪がはやぶさに やられたんじゃないかと思った。

T うん。心配している。

そんなふうに出していけばいい。となりの志穂

志穂……………

勇也わかった！

T (志穂に) 何で走ったの？美豊子は心配だから、 といってる。お前は？

志穂……………

(浩生が手を上げたので、そちらを先に言わせる)

浩生 残雪がはやぶさにやられてるか、死んでるか。 智美 美豊ちゃんと似ているな。

T はい、留美

留美……………

T なにか言って。だまつてるのは、わからんのか、 考えてるのか、先生にはわから

ん。待ってるんだか ら。

留美 心配

T はい、心配する気持ち。……………大輔

大輔 自分のライバルがはやぶさにやられたら、ライバルとはいえんと思つてな、落ちていったらな、ほこで、なんか、期待いうか、絶対やられてへんという気持ちでな、死んだらへんと思つてるの。

真人 絶対生きていると思つている。

あんな、残雪より強いはやぶさと戦つてるやけど、残雪のことやで、絶対生きてると思つて

和幸 絶対生きてる、というより、『絶対生きてほしい』という気持ちとちがう？

真人 うんほうやな。

幸則 大造じいさんは、残雪のことライバルと思つてたんやろ。そのライバルが他のやつにやられてほしくない、という気持ちもあつたと思う。

T うん、やられてほしくない。

前の明子

明子 うんと………さっき、なんか、仲間をかばつてな、残雪が命がけでやつてたやん。

ほんで、そんなの見ててな、感動しててな、ほんで、落ちて、死にそうになったでな、ほんで、生きてほしいと思いが、かけつけた。

T うん。残雪に対するものすごい感動があつた。そこから、生きてほしい、という気持ち。

幸則 さっきみたいにな、じいさんは感動いうか、心を打たれてな、なんか、自然に助けようと、自分の意思で行つたんとちごてな、なんとなく、助けたいという気持ちで行

つたん。

T 暢子どう？聞いてて

暢子 残雪はライバルやろ。ほんで、………はやぶさ みたいにやられてほしくない。

T うん。ほうすると、この時、「しめた」という気持ち、あつた？

Cs ない！

真人 残雪を助けない

T ないね。この時はもう、完全に残雪とじいさんはC 仲間！

T 仲間になつてるんやね。そうさせたものは、なにかといたら。ここの感動ですね。昨日勉強した。

そんな残雪が今死にかかつてるんですね。じいさんは、そんなすごいやつを死なせたくない、生きてほしい、という気持ちで、かけつけた。

じゃ、その続き、留美読んで。

留美 朗読

T 「二つの鳥は、なおも、………ただの鳥に対してい るような気がしなかった。」

一番最後のところですね。

「大造じいさんは、強く心を打たれて、ただの鳥に 対しているような気がしなかった。」(板書)

近づいて、間近に見たとき、「ただの鳥に対しているような気がしなかった」とは、どういう気持ちになつているんだろうか。

はい3分間あげますから、自分の考えを書いて下さいCノートに書く

(あまり、書けない)

T 智士、どう書いた？

智士 ……あんな、残雪を見た時に、大造じいさんは、すごい鳥やなあ、て思った。こんな鳥は見たことがない、と思った。

T うん。いいですね。

そういうふうに書いていけばいい。

C 書く

T 力、書いたこと言ってみ

力 あんな、鳥の中でも一番えらい鳥みたい。自分で も負けそうな気がする。……………

自分よりもえらいさんみたいな気がする。

T はい、みんなちよつと書くのやめて。

智士がね、『ただの鳥に……………』というの、すごい鳥だな、という気持ちなんだ、といっていますね。力は、自分でも負けそうな気持ちだといっている。それは、そんではないですか。(Cうなづく)

そしたら、残雪をすごい鳥だな、と思ったのは、いまが初めてですか。前にもありましたね。一章の時にも、二章の時にもすごいやつだなあ、て感じたんですよ。で、じいさんがここで『すごい』と感じてる中身は、……………

今までにもすごい鳥だと感じてきたわけですよ。それにも増して、改めてここですごい鳥だなあ、て思うのは、どういう中身があるんですか？

保 今まではな、残雪の知恵がすごいなあ、と思ってたやん。ほやけど、今はな、残雪が初めて戦つてるとこ見たやん。はやさかい、戦つてるとこもすごいなあて思ったん。

T うん。今のをヒントにして考えて。

今、保は大事なこと言ったね。今までは、残雪の知恵がすごいなあ、と思ったんだけど、今のこのすごいなあは？

C 勇気

C 度胸。

裕幸 今までは、作戦やったやろ。ほやし、ピンチではなかったやろ。ほやけど、三回目にはただの鳥に対しているような気がしなかった、てじいさんが言うてるやん。ほこでは、もう残雪が危ないやろ。それで、死ぬすれすれやでな、なんか、ここでは、ちがう。

T その「ちがう」は何？もう少しそこをはつきりさせよう。

幸則 今までは知恵にすごい、て感心してたけどな、今はな、勇気もあるしな、仲間を思う気持ちもあるしな、そういうことですごいと思ってる。

T はい。このはやぶさとの戦いで、知恵だけじゃない、もつと別のすごい力を持つてることを知った。それは、仲間を思う気持ち。それから、勇気。

真人 じいさんのおとりであろうとな、わなであろうとな、仲間は仲間なんやでな、助けに行かなあかん力 残雪はな、どの仲間でも助けるのをすごいと思ったのもあるしな、もつと思つたのはな、自分の命を捨ててもな仲間を助けようという気持ちにすごい

と思った。

T うん、それでいいんだけど。

ただの鳥に対してしているような気がしなかったのは、いつからですか？

力 今

T 今のみんなの意見を聞いていると、戦いを見たときに「ただの鳥に対していような気がしなかった」ことになりませぬ。ところが、しごいさんが感じたのは、ここ（終わりの所）ですよ。ほうすると、まだあるんじゃない？ 今目の前で見ている残雪の姿の中に

『ただの鳥に対してしているような気がしない』という内容が。

C わかった！

智子 はやぶさは、じいさんの姿をみとめたら、急に戦いを止めてにげていったけど、残雪はぐったりしていたけど、じいさんを正面からにらみつけたり、最期の時を感じて堂々としている。

力 いいけど、ちがうと思う。

和幸 それでいいと思う。

T うん。今智子は、はやぶさと比べて残雪のすごさを言ってるわけですよ。そこ言える？

和幸 うんと、はやぶさやったらよ、すぐにげていったやん。けど、残雪は、もうじたばたさわがなかったし、正面からにらみつけていたし、堂々としてたやん、それをただの鳥とは思えなかった。

力 あんな、もし、じいさんがかけつけなかったら、残雪は絶対負けてたと思う。はやぶさは、飛立てる力があつたやん。残雪はなかったやん。ほういうところでもすごいと思つたしな、一番最後のところでもな、ぐつたりとしてもじいさんをにらみつけている。

T 残雪とはやぶさを比べたら、はやぶさの方が力が強いわけですね。その強いはやぶさが、人間のすがたを見た瞬間に、（Cやめよつた。）ばたばたとにげていくわけですよ。それなのに

哲郎 残雪は正面からにらみつけた。

T 傷つきながらも正面からにらみつけた。そして、もう、じたばたさわがない。

裕幸 死を覚悟している。

T そういう姿もただの鳥とは思えない、という中身になるでしょうね。

そこで、勇也が昨日おもしろいこと考えてた。

勇也 じいさんはな、びっくりして、しんけんでな、感心してな、じいさんは、がんに負けたと思った。

T わかる？

大輔 うん。こんな、もう死を覚悟してるぐらいやでな、そんなことは大造じいさんにはできひんことやでな、残雪の方がはるかに上回ってるさかい。

勇也 はい！ ずっと前はな、残雪に知恵で負けてたやん。それよりか、もっとすごい。

知恵よりか、もっと驚いている。

T そう。今までは、知恵のすごさで勝つたとか負けたとか言ってたんですね。ところが、今は、もつとちがうものすごさに 「負けた」とじいさんは思っている

智子 今まではな、残雪を下に見たり上に見たりしていたけどな、この時に「残雪はおれより上だ」と思った。

力 やつぱり、というよりもここでわかった。

裕幸 もうこの時は残雪を捕りたいという気持ちはなくなってる
力 やつぱりというよりも、今、自分よりすごいと思った。

和幸 人間をはるかに上回ってる。

T そう、もうこれは、「ただの鳥」なんかではない裕幸 人間以上
勇也 もう、人間のじいさんよりもすごい。

チャイム

【11月13日（金）】

『大造じいさんとがん』⑨

【教材文】

残雪は、大造じいさんのおりの中で、ひと冬をこした。春になると、そのむねのきずも治り、体力も元のようになった。

ある晴れた春の朝だった。

じいさんは、おりのふたをいっぱい開けてやった。残雪は、あの長い首をかたむけて、とつぜんに広がった世界におどろいたようであった。が、

バシッ！

快い羽音一番。一直線に空へ飛び上がった。

らんまんとさいたすももの花が、その羽にふれて、雪のように清らかにはらはらと散った。

「おうい。がんの英ゆうよ。おまえみたいなえらぶつを、おれは、ひきようなやり方でやつつけたかあないぞ。なあおい。今年の冬も、なかまを連れて、ぬま地にやってこいよ。そうして、おれたちは、また、堂々と戦おうじゃあないか。」大造じいさんは、花の下に立って、こう大きな声で、がんによびかけた。そうして、残雪が北へ北へと飛び去っていくのを、晴れ晴れとした顔つきで見守っていた。いつまでも、いつまでも、見守っていた。

【授業記録】

残雪は、大造じいさんのおりの中でひと冬をこした。

T じいさんは、このひと冬の間、残雪に対してどんな思いで世話をしただろうか。

大輔 じいさんは、また残雪とはやく戦いたいから、大事に大事に育てた。

力 同じ。残雪は、じいさんになつかんかったと思うし、じいさんも、なついてほしくなかったと思う。なついたら、またもとのように戦えへんやん。ほんで。

T お前は、じいさんが世話しているとき、残雪がなついてほしい、自分になれてほしいというようなことは思わなかったというのね。

裕幸 残雪は、たった一羽のじいさんのライバルやる。それだけに、大事に大事に世話した。

T うん。善崇

善崇 ……

菜穂子 残雪は、じいさんとライバルだから、早く元気になってほしい。

T ということは、はやく戦いたい、ということですか。(菜穂子 うなづく)

美希 なんか、ひきょうなまねしたことを後悔しながら、傷を治していると思う。

勇也 ぼくもいっしょ。

T 後悔。

貞幸 なんて後悔するの。

T 美希、もうちよつと言つて。

美希 大造じいさんはな、自分のがんを残雪に助けてもらって残雪はけがをしたから、なんか自分のせいだなあ、と思える。

T わかった？なんか、残雪をけがさせたのは、自分 のせいみたいな気がしてる、というのね。

力 ぼくはちがう。

自分のライバルを助けたことは、自分でもよかつ たと思ってる。

あのままやってたらな、

T やられてしまうわな。助けてやってよかつた、い うんね。他の人は？……

じゃあ、さつき力が出した意見について。

じいさんは、なついてほしいとは思わなかった、という意見を出したんだけど、みんなどう？賛成する？

C (うなづく)

T つりばりの計略でつかんだがんは、ちよつとでも自分になつくように世話をした。でも今残雪に対しては全く違う。……それはなぜ？

ただ元気にさえなってくればいいと思うのは？

智士 なついてくれたら、今度戦うとき、うちとうのうなるの。

和幸 なついてきたら、かわいいなる。

力 前みたいな戦いができひん。

T ほうすると、みんなは、敵でありたい。戦いたいからなついてほしいとは思わなかったという意見ね。みんなそう？

幸則 ちがう！18ページに、「おれは、ひきょうなやり方でやっつけたかあないぞ。」て書いたるやん。ひきょうなやり方とって、なついてほしいとは思ってへん。

T うん、だからどうなん。……

どうなんかな。残雪がなくなっていく。そのままでもいい、と思うのは、また戦いたいからなんかな。

哲郎 なついたら、じいさん、なんかうてへんようになる。なんか、もう仲間みたいになつてしまう。

T あのおとりのがんみたいになってしまったら
大輔 もうしようもない。
美希 なついたらもうかりの仕事ができひんようになる。

①「残雪はじいさんになついたらだろうか。」

②「そういう残雪にじいさんはどう思ったか。」

力 第一、残雪はなつかんかったと思う。残雪はじいさんを敵とってるから。

裕幸 いつ殺されるか、と思ってた。

T あのかしこい残雪がそうかんたんにじいさんになつくはずがないね。警戒しつづけ
たでしょうね。

そういう残雪をみて、じいさんは、こんちくしょう、にくたらしい、と思ったでしょ
うか。

裕幸 そのままでいいと思った。

和幸 やっぱり残雪はその方がいい。

T なつかない残雪の方がいいんだ、という気持ちね

そこは、そのくらいにしといて、次いこう。

ある晴れた春の朝だった。

じいさんは、おりのふたをいっばいに開けてやった。

勇也 いやあないで、にがしたろうか。

T うん？そういう気持ち？

勇也 いやじようだん。

T どう？いよいよにがす時がきたんですが、じいさん、しぶしぶ、まあしかたがない
か、という気持ちでにがしたんだろうか。

Csちがう！

力 そら、とんでいけ！

和幸もし、そういう気持ちなら、半分ぐらいしか開けへん。

真人 半分も開けへん。

T わかった？もういつぺん言って。

和幸 もし、にがすのがかなんのやつたら、少ししか、開けへん。

T 「いっばいに」には、なんかじいさんの気持ちがありますね。ただ、「おりのふたを
開けてやった。」じゃなくて、「いっばいに開けてやった。」

さあ、この「いっばいに」からじいさんのどんな気持ちを感じられますか。

勇也 その前に、「ある晴れた春の朝」

T うん、そこもあるね。ついでにこれも考えて。

「ある晴れた春の朝」これは、たまたまそういう日だったのか、なんか、こういう日
を待っていたのか。さあ、女の人自分から言って。

弘子 こういう日に残雪をとばせてやりたかった。

T おお、いいこと言う。雨の日なんかじゃだめというのは？

真人 雨の日では、残雪がかわいそう。

勇也 いつも小屋でじいっとしてやる。ほんで、こんな日やったら、残雪が喜ぶと思
って。

T いいこと言うね。みんな勇也の考えもらえないかな。

勇也、もういっぺん言うって。

勇也 残雪は、おりの中でいつもじっとして、ぐったりしてたやん。ほんでな、せつか
くこんな晴れた日やでな、残雪もこんな日に飛ばしたったら喜ぶなあと思ってるな、大造
じいさんが残雪の気持ちになってな、こんな日にとばしたたらうれしい。

T わかる？

志穂 これで、残雪の傷も治ったし、広々と空をとばしてやれる。

T うん。冬の間、暗い、ちっちゃい小屋の中におったわけですね。

美希 勇也君とちよつと似ているやけど、じいさんは 晴れた春の朝がな、残雪が一番
喜ぶし、自分が飛びさっていくような感じで残雪の気持ちも思ってると思う。

T じいさんが残雪になったような気持ちでね。

和幸 すがすがしい。

いっぱい開けてやったというところで。

T じゃあ、こっちへいきましようか。「いっばいに」

寛子 残雪は仲間の所へ早く帰れよ。という気持ち

智士 大造じいさんは残雪を仲間の所へ早く帰してや りたいの。

美豊子 大造じいさんは、残雪に「お前がはやくかえらないと、お前のなかまがまた、
危険な動物たちにねらわれるといけないから、一日も早く、もどれよ。」という気持ち。

弘子 これからも仲間を救ってやれよという気持ち。勇也 うんとな、大造じいさんは
な、こんな日はめったにないと思ってるな、いっばいにひろげた。

T こんな日はめったにない、ってどういうこと？

勇也 残雪がけがすることは、めったにないやん。その残雪がけががなおってきてるや
ん。そんな日はあ んまりないで、残雪ははやく元気になって……

T 勇也の「こんな日はめったにない」という所が大 事なのね。

力 はい！あんな、晴れた春の朝というのは、そういう日じゃないと、おじいさんは、
残雪を飛ばしたくなかった。

和幸 雨やったら、じいさんの気持ちも晴れ晴れしいひん。じめじめしてるし、じいさ
んの気持ちもすっきりせん。

T じいさん、残雪をにがしてやることをいつから考えていたの？

智士 もうつかんだときから。

T そうですね。つかまえた時から、こいつをにがして やる日のことを考えながら、治
療してきたわけです。ね。その最後の日がやってきたわけです。それが、勇也の言うて
る「こんな日はない」ですね。

勇也 はやく自由にさせたい。

T そう、自由にさせたいという気持ちで世話してきたわけでしょ。その日を待ってい
た。

力 それがついにやってきた。

T その瞬間だから、おもつきり、いっぱい。

裕幸 残雪はな、じいさんのおりで過ごしてるときは な、殺されるかと思つて心配やつたやろ。ほんで、おりをいっぱいあけて、大造じいさんは正々堂々と逃がすぞ、というのを残雪に伝えたん。

T ほう、ほれもおもしろいね。今のわかつた？

力 なんか、残雪に「さあ逃がすぞ」て

T きつぱりと。そういう気持ちを入れてる。

美希 私は、残雪の気持ちの方考えたんやけどな、他のりようしやつたら、つかんだままにしとくか 食べてしまふかするけど、なんかじいさんのやさしさが今わかつたような気がする。

T ああ、じいさんの気持ちも伝わったんじゃないか、というのね。

勇也 うんとな、いっぱいにあけた瞬間にな、大造じいさんは残雪に、「立派に戦つてくれ」と言つてる。T 裕幸が言つた「正々堂々と戦おう」という気持ちとっしよかな。

力 もう、「さあ早くみんなのもとへ帰れ」と言うたと思うしな、その時にな、じいさんは「まだまだおれたちの戦いは終わつてない。始まつたばかりだ」と思つたと思う。なんか、一番はじめに残雪と出会つた感じがする。

T ほう。おもしろいね。今まで長い戦いがあったんだけど、今また、新しい残雪とじいさんの戦いが始まるスタートみたい気がする。

じや次に行きましよう。

「残雪はとつぜんに……いつまでも見守つていた」善崇 さっきの所にもどるけどな、

「このときを待つていた」というところあるやろ。これはな、ほの時も待つていたかもしれないけどな、「らんまんとさいたすももの花がその羽にふれてはらはらと雪のように散つた」て、大造じいさんとがんはな、……大造じいさんはこれを見たら……

T らんまんとさいたすももの花が？そこにじいさんの気持ちがある？

善崇……

裕幸 なんか、はやぶさと残雪は戦つていて、胸の所をくれないにそめたあの残雪がらんまんとさいたすももの花がその羽にふれてとびちるような、そんな元気になつてじいさんはうれしい。

和幸 ふらふらとじゃなくて、一直線に。

T 一直線にバシツと飛んでいく姿が

勇也 なんかな、じいさんは、うれしそうに見てる。残雪が元気で。元気やでうれしかったん。

T バシツと一直線に飛んでいく姿を見て、じいさんは、胸のすくような思いだった。

それとつながるのかもしれないが、「晴れ晴れとした顔つきで見守つていた。」

「晴れ晴れ」というのは、どういう意味ですか。

C うれしい。

C にこにこしてる。

T 心が晴れるんですね。心の中のもやもやがすかっと晴れるということですね。どういことがじいさんの心を晴れ晴れさせただろう。

保 残雪がはやぶさと戦って落ちたところをおじいさん助けたやん。ほんで、ちゃんと世話して、元気になっておりから逃がしたったやん。ほやさかい、なんか心がすつとした。

T 助けて、なんとか、元気にしてやりたい、逃がしてやりたいということをここでやりきったわけですね。見事に飛びたつていった。それが晴れ晴れ。

重紀子 仲間を助けて、はやぶさにやられて、ぐったりしていた残雪を助けたじいさんが、ずっと手当てしてきて、こんなに元気になって逃がせたので。

和幸 残雪がライバルではなくて、なんか、友達というか、仲間みたいな気持ち。

T わかる？ どういうことなんかね。

3章までの おれとライバルという関係とまたちよつとちがう。

和幸 戦ってるのがなんか楽しいような。

T 残雪に対するすごい感動がありましたね。

幸則 傷をいやしてやることができ、今元気に飛びたつていく姿を見て、晴れ晴れとしている。

力 残雪は、おじいさんの方をふりむかずにそのまま 飛び去っていったやん。それやでな、なんか、晴れ 晴れた気持ちになったん。

裕幸 いつもと反対なん。じいさんからにげていくのはくやしかったけど、今はうれし
いん。

佐夜子 じいさんは、残雪を見ているときにな、いつもの残雪じゃないような気がした。

T 今までとちがう残雪？

力 もつとするどい残雪

和幸 残雪にがんばれよ、ていつてる

勇也 晴ればれた日やでな、残雪はすうつと飛んで 行った。

T そうね。晴れた空にすうつと飛んでいく姿を見るのが、気持ちよかったですよね。

チャイム